昭和七年一月十二日第三種郵便物認可 毎月一回一日發行
昭和十四年九月十日印刷納本 昭和十四年十月一日發行 第七卷 第十號

エスペラント

LA REVUO ORIENTA

十月號

Jaro 20 N-ro 10



Oktobro 1939

エスペラント
LA REVUO ORIENTA

• Okobtro 1939 •

表紙：El la japana arkitekturo—Nova domo de Japana Radio-Asocio

扉：三宅史平・外國語教育と國民的自覺心

Ŝ. Mijake: Pri raciigo de la lingvoedukado en la duagradaj lernejoj

LA ENHAVO

エスペラント

十月號

外國語教育と國民的自尊心

外國語教育が國民的自尊心を傷けるとゆうことは，あり得ないはずである。だが，局部的な「はず」にこだわる眼には，事實は，しばしば「はず」をうらぎる。

「外國語教育は國民的自尊心を傷ける」とさけぶ人をショヴィニストと呼ぶにしろ，かく考える人を教養なき者とさげすむにしろ，それは，かれらが，國民的自尊心を傷けられている事實の分量に對し，いささかも影響を與え得ない。

ひとびとは，あるいは，これらショヴィニスト，教養なき人たちの存在を計算にいれなくてよいかもしれない。しかも，ひとびとは，なお，この考え方のよつて來る源をきわめるべき義務からのがれることはできない。

これらの「ショヴィニスト」たちのうちには，今日，「支那語を學べ」とさけぶ者もめずらしくない。一應矛盾に見える，この事實のなかに，問題の解決が横つている。

すなわち，今　，ひとびとが支那語を學ぶことには明かな目的があり，中等學校の英語教育には明かな目的がない——より正しくは，目的が明かでない，むしろ，かつてあつた目的が行衞不明になつている——のである。（中學生の一部分にとつては，明かな目的がある：上級學校の入學試驗に合格するため！——この部分は，だから國民的自尊心を傷けられたと感じない）。

中等學生にとつて，あるいは一般社會にとつて，目的の明かでない學科は，英語に限らない。むしろ，中學校そのものの目的が明かでないかもしれない。しかも，英語のみが問題になるのは，言語のうしろには民族の呼吸が感じられるからである。

われわれは，なぜ，英語に，かくも多くの時間を捧げなければならないか（學校における１週７時間は問題にしない。家庭の，美しい「生活」の時間をまで，あくことなく侵略する英語に呪いあれ！）——この疑問が，わかい魂に懷疑を植付けないか。その懷疑が，國民的自尊心の問題にまで發展しないか。意識してか，しないでかは別として。

われわれの愚かしい問題のおこる源——すくなくも，それのひとつがつきとめられた。すると，現實の狀態を，正當な「はず」へひきもどす道は，おのずから明かである。

すなわち，「目的を明かにせよ！」である。しかし，この「目的」を，紙のうえ，舌さきで示せば足ると考えるならば，「はず」は，永遠に「はず」にとどまる。

中等學校における外國語教育（結論だけゆう：必要である）をして，それの正しい目的にそわしめる，もつとも合理的な方法（明治時代のでなく，昭和時代には，昭和時代の）を探しだし，これにしたがつておもいきつた改革を施す，これが，その道である。

問題を——ここに自白すれば——便宜のうえから，「國民的自尊心」の問題から發展させたが，この問題があるといなとにかかわらず，外國語教育の改革はさしせまつた問題である。そして，その解決には，國民の，國家への協力の特別に強い，現在の瞬間がもつともよい機會である。この問題さえ解決されれば，たとえば，英語教育界の１部が，現在，飛びゆく鳥影におびえているがごときおろかなわざもなくなり，英語學もよりよい，そして正しい發展をとげることができるであろう。

その合理化の方法——それは，エスペランティストには，たれにも，おうかれすくなかれ似かよつた答えの準備がある。

三宅史平

中等教育における外國語問題の再検討

I

社會各方面の識者はこう考える

この欄に限り，カナヅカイは，それぞれの執筆者のシステムによる

市川源三

鷗友學園高等女學校長；全國高等女學校長協會理事長

1 必要：世界文化に接觸の爲外語教育を必要とす。世界各國皆然り。今日の現狀は達し居らず。

2 然り：當分然らん。支語の必要あれど，支語それ自身不統一にて之を採用するに迷ふ。英米は當分世界の强力ならん。歐洲各國にて次第に英語を用ゐ來れり。英語は今や世界語なり。

3 先づなし：多少あれど教師の態度にて何の影響なからん。女子に歐米崇拜者あれば日本の男子が餘り女子を無視する故其の腹いせを外人に對して行ふなり，語學教授には關係なからん。

4 必要：1, 2 年に 3, 4 時間。3 年以上は選擇制を設け，希望者に 5, 6 時間を課すべし。

5 英語教員にして實力あるもののみを殘し他は國語教師に轉向せしむべし，彼我共に利する所あらん。

○

三井高陽 男爵

國際文化振興會評議員

1 必要：今日程偏重ならざる程度に於て或程度は必要。

2 否：英語必ずしも世界語ならず，英語第一の必要なし。英，佛，獨，支，西選擇せしむる事は理想なれど可能なりや否や疑問。

3 なし。

4 必要：少くすること。

5 社會的處置により他に轉ずる方法幾多あるべし。

○

花園兼定

早稲田大學教授；ウォールド・ダイゼスト副主筆

1 必要：日本の歷史的事實，日本の現狀及び世界强國文明の經驗，且つ人類共存共榮の原則から，中等教育時代に外國語を學ぶことは必要だ。現狀は遺憾の點がある。中等學校だけで雜誌位ゐは讀めなければならない。雜誌の論文の讀めない人が教へてゐるやうな現狀だ。

2 否：日本は世界各國と交通し彼我密接な關係を有し，英語だけを第一にする理由は成立たない。外國語は選擇に委していいと思ふ。

3 なし：外國語を中等學校で教へることが國民の自尊心へ影響すると考へるごときは無意味である。

4 必要：選擇語學の時間はもつと增加しなければ效果はない。

5 英語教員の生活が脅かされることは私の

―― 問　題 ――

1 中等教育における外國語教授は必要でございますか，その目的は？ 現狀はその目的にそいますか。不必要ならば，その理由。

2 必要とすれば，今後も英語第一でゆくべきでしようか。その理由。いなならば，その根據と今後の對策。

3 外國語教育は國民的自尊心に影響をおよぼすおそれはありませんか。あれば，調和の手段。

4 授業時間數，その他に合理化の必要はありませんか。あれば，その方法。

5 英語科廢止，または縮小のばあい，英語科教員の處置はどうつけますか。

考へからは起らない。もしさういふことがあれば，その對策はいくらもある。英語教員で英語だけしか知らない人はある筈がない。もし日本人でさういふ人があれば，それは恥辱である。

○

津久井龍雄

著述家

1　特に必要だとも思はぬが，然らば代數幾何三角等も一般には不用ならん，矢張り適當に課しておいてはどうか。

2　特に何國語を選ぶとなれば矢張り英語ならん乎。

3　小生の經驗においては全くなし。

4　大體現狀のままにて可ならん。外國語をへらして國漢文を增すなど〻必要はなし。

5　小生の右の主張によれば英語教員の處置を特に考ふる必要はないが，若し整理でもされる場合は，政府も民間も大いに外國良書の飜譯を奬勵し，彼等をして，その仕事にあたらしめたし。

○

紀平正美　文學博士

國民精神文化研究所員

1　必要：然し重要學科とする要なし。

2　否：必要と見る限りのものをとるべし。然し今しばらくは英語なるべし。

3　あり：自國乃至自國語の尊重によりて自ら解決せらる。

4　必要：中學校に於ては最上級 2 年間，1 週 2 時間にて事足る。

5　人力車夫に相談して後に自動車が發達したにはあらず。

備考：外國語教授の意義の徹底は更に國籍なき語の不必要と云ふこととなるべし。

○

藤原咲平　理學博士

中央氣象臺長

1　必要：交通の發達と共に從前に倍し外國語を必要とす。

2　否：主な外國語英，獨，佛，伊，露，西，支那語，甲乙を付けず選擇とす。教師の缺乏の爲め當分は右の中 1, 2 を加へ，[illegible]す。ラヂオを利用す。

3　なし：外國語を學ぶことは各國民皆必要大古より實行さる，自尊心とは無關係。

4　必要。

5　漸次他語學に轉科させる。

○

茅野蕭々　文學博士

慶應義塾大學文學部教授

1　必要：外國語といふものに馴れしめることを目的としたし。現狀は改善の餘地があると思ふ。

2　否：英語を第一にする必要はない。他の言葉でよい。將來その人の志望に尤も直接役立つものを選ばせては如何。

3　なし：殆んどないと思ふ。英語を習つたから親英派になるといふやうなことはもう前時代のことでは無いかと考へる。

4　必要：合理化の必要はあると思ふ。論ずれば長くなるが，所謂語學的なものの外に，實際の役に立つ本も讀ませるやうにしたい。

○

神保　格

東京文理科大學教授

1　必要：エスペラントでも「日本語でない」といふ意味で外國語でせう。外國語（國際語を含めて）の不必要論は言語的鎖國論であつて勿論不可です。

2　然り：1. 從來の傳統の存在すること。傳統の全く無い所へ「英語第一」かどうかを考へるのとわけがちがひます。傳統の有る所へ之をやめて他を置き換へる時はよほど强い理由がなければなりません。

2. 北米合衆國，カナダ，オーストラリヤ等が支那やロシヤと共に，我が隣國であることを忘れてはなりません。

3.「第一」とする外國語が必ず一國語に限る，二つ以上あつてはならぬといふ理由は無いでせう。

3　なし：外國語學習の態度による。今日盛に行はれてゐる支那語學習はどうですか。自尊心の問題を口にする人が無いではありませんか。英語を學ぶことは英米の殖民地の様になるなどと論ずる人は，その人自身の心の中に一種の事大思想がこびり附いてゐるのでは

ないかと自ら省みる必要があります。

4 必要：合理化が不必要などといふ亂暴な論をする人がありますか。

5 もつと數を殖すこと。もつと質を向上させること。勿論日本語の教員，英語以外の各國語教員についても全く同じ。

○

志賀 寛

世界維新教育協會常務理事，教育評論家協會理事

1 否：國民一般が外國に學ばなくてはならぬと云ふ程のものはもうなくなつた。それよりも科學のために時間をさいて日本的なものを建設すべきだ。

3 あり：取扱の根本的態度方針が總てを決定する。

5 1. 時局の爲め大量缺員になつてゐる教育界の他の部面に働いて貰へばよい。6ヶ月位の再教育を施した上で。

2. 支那に送つて日語の教育に當らせるも一案。

○

有島生馬

帝國藝術院會員；一水會會員，ペンクラブ理事

1 必要：必要を認むるも，それは外國語練習が頭腦の錬磨に役立つといふ意味よりなり故にラテン語などは尤も理想的なるべし。

故に

中等學校にては之を各人の隨意科とし，各人その後の修業と職業に必要なる外國語を隨意に修學すべし。

2 否：1の理由により本人の必要と好むままに外國語を隨意科として修學すれば成績の上にも好ましかるべし。英語に限るべからず

3 あり：2, 3ヶ外國語を知るものは自ら自尊心を增すべし。

4 歐洲語の代りに中學にては國漢文，殊に漢文學の時間を增加すべし。漢文は日本人に一番必要なる外國語なるは云ふまでもなし。(現代支那語に非ず)。

5 英語教員の一部は翻譯官に——一部は他の學科を教授する能力あるべし。(なき者は退職)。

○

林 髞 醫學博士

1 必要：日本はこれから世界文化に常に參加する必要あり，從つて一つの外國語は必要である。

2 否：英 佛，獨，露，支の五つどれでも採用よろしとする。中學によつて，この五種あることとする。高等學校入學の外國語試驗もこの五種でやる。

3 なし：但し日本について充分教へることは必要である。

4 必要。

5 佛，獨，露教員に轉ぜしむ可し。さして困難ならずと思ふ。

○

春山行夫

「セルパン」編輯長

1 勿論必要：但し，選擇科目とするか，語學を中心とする特殊の中學をつくる。

2 (1) のシステムにより，數ヶ國語（英佛獨）を同等に教育。英語は英語だけ，フランス語はフランス語だけで，その他に融通の利かない英領乃至佛領植民地のやうな語學教育は不可。一國語を中心として呼ばず，外國語と呼ぶこと。

3 外國語を知つてゐることは立派な國民といふ考へを持つていいでせう。學問的研究などは，外國語を知らずには不可能で，單なる觀念的ショヴィニズムは排すべきです。

5 英國植民地官吏の如き英語教員フランス植民地官吏の如きフランス語教員に，外國語全般の試驗をする必要があるでせう。

○

高神覺昇

宗教家；全日本眞理運動主幹，智山專門學校教授

1 必要：現今の如き外國語教育はその本來の目的に副ふとはいへない。外國語教育中心の如き感あり。修正の必要あり。

2 否：現今の世界情勢としては英語は國際語として便宜なるも，再考を要す。今後は支那語を第一に，英語を第二とすべし。

3 自尊心を傷けることもあり，また傷けることなしともいひうる。日本が世界日本として將來發展するには，勢ひ外國語を知らねばならぬ。然しそれは日本人としての自覺をもつた上のことなり。この自覺なくして外國語を學ぶことは危險なり。

4 必要：教育時間を短縮し，專ら補助學科とすべし。須く外國語教育萬能の感ある今日の情勢を打破すべし。

5 その淘汰は免れざるも，英語を廢止せざる以上，英語教員の存在は尙必要なり。

○

牧野良三

衆議院議員

1 必要があります。世界的に交つてゆく爲めに。如何に日本語中心でゆくとしても獨善に陷つてはなりません。極右的な偏狹はいけません。

2 英語第一がいゝでしよう。話が出來，新聞が樂に讀める程度を中心にしてゆきたい。

3 外國語が判らないと，自尊心を傷けます。外國語が判ると國民的自信がついて來ます。

4 適當に。

5 必要なし。

○

永野芳夫

大正大學教授

1 一部的に必要：一般的には不必要。但し外國語をよく教へる小數の中等學校を必要とする。

2 否：英，佛，獨，支語はなるべく平等の範圍で。エスペラント自體を今すこし盛んにしたいものです。その上にて學校へ導入したい。

3 概してなし：但し教育の大本には注意すること。

4 案なし。

5 英語教員は國語等の敎員にも使へます。

○

二荒芳德 伯爵

貴族院議員

1 必要：敎へ方には考慮を要す。

2 否：主要なる語を三四國選び選擇をすべし。

3 なし：外國語を使役する態度にて臨むべし。

4 必要。

5 教師用の參考書をもつと豐富にすべし。

○

TANAKADATE-Aikitu

Rigaku Hakusi

Teikoku Gakusiin Kaiin; Nippon Rômazikai Kaityô.

1 Hituyô: tadasi hito ni yotte iranai Baai mo arô. Tyûtô kyôiku dakede Zitugyô ni tuku mono wa, siite hituyô arumai. Sikasi, gendai ni oitewa Rômazi de Kokugo o kaku koto dake wa zehi narawasetai. Kore o yarasete okeba Gaikokugo wa Dokugaku de demo hituyôna mono wa dekimasu. Sôiu Ziturei mo sôtôni arimasu.

2 Ina: Kongo Sekai no Keisei wa dô kawaru ka wakaranai. Gaikokugo no Kyôiku mo sore ni sitagatte kawarubeki koto wa motiron de aru. Mono ni yotte, Daiiti, Daini no Mikomi ga tigau koto wa genzai demo wakaru tôri de aru. Tatoeba, Igaku dewa Doitugo, Syôgyô dewa Eigo, Hôritu dewa Huransugo, Mono ni yottewa, Sinago ya Arabiyago o Daiiti to suru hituyôno mono mo arô.

3 Ari: Syotô-kyôiku ni oite, Kokugo no Kumitate to sore no tattobubeki koto o sikkari osiete, sorekara Gaikokugo o osierubeki de arimasu. Kono Zyunzyo o ayamatte ita tameni, koremade zuibun hutugôna Kekka mo atta koto wa dôsitemo tamete naosaneba narimasen.

4 Hituyô: Kokugo no Kyôiku o Daiiti to subeki wa iu mademo nai. To ittemo, Gaikokugo no Kyôiku mo kessite okotaru wake niwa yukanai. Zikan wa, Kyôzyuhô no Kairyô ni yotte narubeku mizikaku suru yôni tutometai.

5 Eigo-kyôin wa, sugureta mono o motte iru koto wa hituyô da. Namazikkana mono wa, Tûben ni demo sitara yokarô. kore mo Eigo-koku o aiteni Sigoto o suru mono niwa

hituyô da kara, Kyôin o tôtasuru koto wa, yagate, Kyôiku no Kôka o takame, sitagatte Zikan wo tizimeru koto nimo naru.

○

高野岩三郎　法學博士

帝國學士院會員

1　必要：外國語教育の現狀をよく存じませんから正確にお答へ致しかねますが，海外文化との接觸，其の長所の攝取の基礎を作る上に必要と思ふのであります。

2　然り：英語が事實尤も廣く行はれてをる現狀に卽して英語第一とするのが良からうと存じます。

3　なし。

○

關口　泰

東京朝日新聞記者

1　初等教育に於てローマ字，エスペラント初歩を終り，外國語教授への道を開きおき，中等學校にては讀書本位に何れか一つの外國語教授を行ふこと。

2　現在は餘りに英語のみに偏するやうなれど，中等教育に於ては結局，獨佛露等より英語が多くなることゝ思はる。支那語教育などは別の立場から行はるべきものならん。

3　外國語を習つて傷けらるゝが如き自尊心では致方なし。自尊心を以て外國語を學ぶべきなり。

4　問題は中等教育，高等學校教育に於て語學の時間が多すぎ，他の實質的學課の時間に喰ひ込む點なれば減少の必要はあり，それには文法會話作文は二の次とし，本科の外國語は讀書本位とすること。

5　此の如くなれば英語教員は全部必要なくなるわけでなし，又英語教授の外能なく，生活力無き人々にてもあるまじく，他にも時勢により，轉業を餘儀なくする者は多き世なれば，教員の處置を考へてから中等教育における英語教授といふ如き大問題を決するは順序顚動なり。

○

馬上孝太郎

東京高等師範學校教授，附屬中學校主事；茗溪會，帝國教育會理事

1　必要：中等教育の種類にもよりますが，中學校教育にはことに必要です。普通の外國語を了解し運用する能を得しめることが目的でせう。然るに現在ではこれ等の目的によく合つては居りませぬ。

2　然り：外國語として，英語の位置高き爲め。滿洲語，支那語等も必要ですが，之は外國語と考へぬ方が可いと思ふ。

3　なし：教授する教師の思想態度が可ければ自尊心を傷つける虞ない。

4　必要：時間數を增し教授法を學徒の心理に合致するやうにしたい。

5　前述の理由により英語教員の處置は不必要，但再教育その他によつて教授能力を高める必要あり。

○

高田保馬　文學博士

京都帝國大學教授

1　必要：目的は知識技術の吸收の爲。能率をあげ得る改善の方法はありと思へども，今日の方法が根本的に誤れりとは信ぜず。

2　然り：右の目的に便利なる故。

3　なし：自尊心を失へるものありとすれば一般民衆に非ずしてむしろ英人と直接に社交的交涉をもつ上級の事なるべし，英語教育の罪に非ずと信ず。

4　必要：詳細は專門家に任せたし，外國語教育を輕視することは日本文化の前途の爲寒心にたへず。

5　必要なし。

○

イトウ　チユウベイ

伊藤忠商事，吳羽紡績株式會社社長；
甲南高等學校理事，カナモジカイ理事

1　必要：外國を知るは自國文化をすゝめる key として。

2　否：外國語なる以上，苟も一國に限るべからず。今の樣に英語專用は不可。

3　なし：なぜならば他を知り彼れを探る以上自己愛念は自ら生ず。

4　必要：語學教諭，教授の今少し社會の常識具有の必要。

○

入澤宗壽　文學博士

東京帝國大學教授；新教育協會副會長

1　必要：海外の事情，文化を知るため。現在は要らぬ方面に力を入れてその目的に適ひ居らず。

2　然り：米，英その他の國に於ても英語による場合多き故也。ドイツにても現代外國語の第一をフランス語たるを止め英語とせり。

3　あり：外國語，外國文化を知ることは日本のためなることをよく徹底すること。國語を尊重すること。

4　必要：初學年に會話作文を主として外國語になれしめ，高學年は讀解力をつくるやうにする。

5　外國史，外國地理，もしくは國語漢文をも受持ち得るやうにして置くこと。つまり國民科の全體を受持ち得るやうにして置くこと必要也。これ決して至難のことにあらず。從來の分科，專門化が中等教育には不可なりしなり。

○

朝倉希一　工學博士

汽車製造株式會社常務取締役；日本工學會理事，國語協會理事

1　必要：或る程度まで見聞を廣くし，外國語の常識を得せしめ，外國語の書籍や雜誌を讀み得る基礎をつくる爲め。

2　然り：外國語の中で實用的勢力のある英語を多少でも知つた方が無難の人が多いと思うから。然し英語の重要さを從來の樣に認めないで良いと思うので南洋向のスペイン語或いは支那語を敎えることも良いが，それ等の採用の範圍については研究を要します。

3　なし：敎え方によるでしよう。外國語を排斥して國民的自尊心を高めると國內の改良が出來なくなる樣な氣持ちが致します。

4　必要：時間を半減し，文學的のことは避け，簡單な會話の出來ることは良いが，主として實用向の讀書力を養いたい。

5　一般普通の事務員に採用するのでしよう。外國語の時間を減じる一方國立翻譯局の樣なものを作つてそこの翻譯を受持たせるのも一方法でしよう。

○

藤澤親雄

政治評論家

1　必要：選擇課目として存することに必要。

2　否：支那語を主とすべし。

3　なし。

4　必要。

○

德川義親　侯爵

貴族院議員；華敎育振興會會長

1　必要：外國語も知つてゐるといふ自信を持たせる爲。

2　否：理由は第一と同樣，だから何でもよろし。

3　なし：ありとすれば敎育法が惡いから。東洋語と西洋語の根本の相違の學問的の研究が出來ない爲に，東洋語の本質を知らないのでこんな問題が起きるのです。

4　必要：當然の事です。敎育者が研究すればよいでせう。

5　自然に方がつきませう。不まじめの答のやうで，此以外に考へられますか。

○

八杉貞利

東京外國語學校名譽敎授

御質問の事項は孰れも小生專門以外の事で，從て自信ある御答を致兼ねます故控へさせて頂きます。惡しからず御諒承下さい。

○

小倉進平　文學博士

東京帝國大學敎授

1　必要：日本人たることを忘れるまで，外國語に心醉することは不可ですが，將來の學問のため或は修養のため，中等學校で外國語を課することは必要と存じます。

2　然り：外國語學習は國家の幸福增進を目的とすべきものである以上，これに最も適切な語學を選擇する必要があります。それには今の所尙は英語で行くのが穩當と思ひます。近頃支那語が云々せられて居るのは理の當然で誠に結構なことではありますが，世間は事物に對し餘りにあわて過ぎて居る傾向がある

やうに感ぜられます。

3 なし：自己の學を磨き，自己の修養に資する爲めの學習であることを十分納得せしめたならば，國民的自尊心を傷けるどころか，却つてそれを發揚する動力となると存じます。要は外國語に呑まれてはならず，呑んでやらねばならぬと思ひます。

4 合理化の必要があると思ひますが，話が長くなるから省略させて頂きます。

5 まだ考へたことはありません。

○

新村 出 文學博士

京都帝國大學名譽教授

1 必要。

2 然り。

3 なし。

4 大に必要あり。

5 國語を深く學ばしめ，國語の知識を完全ならしめ，內外本末の別を辨へしむるやう英語教育を改善すべし。

○

青木節一

國際文化振興會主事；日本放送協會海外放送委員，觀光局計劃委員會委員，日獨文化聯絡協議會日本側常任委員

1 必要：讀む力と話す力と兩方を發達せしむべし。

2 然り：外國の言葉を習ふことは便宜の問題で理論や主義の問題でないと私は思ひますから，從つて今日一番世界で實用に使はれてゐる外國語を學んだ方よろしと考へます。

3 何等影響なし。明治時代の先輩は大體外國語で勉强した人であるが，その爲め國家を危くしたる事なし。

4 技術的のことは知りませぬ。

5 日本人の先生についてはどうするか考へはありませんが，外國人の教員は現在のやうな詮衡任命の遣方でなく，組織的にやり，結局その人達が本國に歸つたら日本の爲めに何等か役に立つやうな人を選びたいものです。

○

神田正雄

著述家，海外社長；海外事情研究會理事長

1 中等教育と概括的にいふても商業學校では英語か支那語か兎に角外國語の必要がありませう。一般の中學には不必要と存じます。

2 一般中等教育に外語の不必要を考へてゐますので此問題は申上げる必要はありますまい。

3 外國語を教ふると國民の自尊心を傷けるとは隣國の支那で淸朝時代に盛んに唱へられて外國を卑んだものです。私は其人に能力があれば外國語の出來るに限つたことは無いと思ひます。一面から申すと外語を知ることは世間がそれだけ廣くなつたとも考へられます。

4 一般中等教育に時間が惜しいのと實際外語を役立てる人が少ないので之を廢したいと思ふのです。能力のある者必要ある人は餘暇にやるやうにしたらよいでせう。

5 中等學生で正科以外に餘力のあるものは私塾的の所で外語を學ぶやうになれば現在の外語教員の困ることは無いでせう。それに一般が外語が出來ぬとなれば外國事情等の飜譯その他何程でも仕事がありませう。

○

澤瀉久孝 文學博士

京都帝國大學教授

1 目的は(1)表現形式を異にする言語の習得による思考力の養成と(2)外國文化の攝取とにあり。(1)の爲には極めて基本的な教授のみにて可なり。(2)の爲には專門學校に學ぶ者のために選擇科目とすべし。

2 否：英，獨，佛，露，支等の國語の初步を選擇科目として學ばしむべし。現時の如き女學校の英語は國語の美を破壞する以上にとりえなし。

3 なし：上の如くせば。

4 必要：國語教授時間の三分の一以下に減ぜしむべし。

5 短期講習により他の外國語教授にあたらしむべし。優良なる英語教員ならばその事易々たるべし。又外國地理，歷史等に轉ぜしむるも可なり。かくて徐々にその數を減ずべし。

○

土岐善善

京京朝日新聞論說委員

1 第一學年第二學年においてエスペラントを課し，次でドイツ，フランス，イギリス各語を選擇學習せしめる。

2 イギリス語を第一とする理由はない。然し外國語は，どれか一つ習得する必要がある。

3 外國語をならふことと，正しい日本語意識の昂揚とは矛盾するものでないと思ふ。

4 1の方式によると，一週間に六時間ぐらゐで，エスペラントは各個のものにする。その上でなら他の外國語はらくにやれるやうになる。

5 しばらく日本語の勉强をしてもらふやうにしたらどうかと思ふ。エスペランチストにするもいゝと思ふ。

○

三宅正太郎

長崎控訴院長；國語協會理事

1 必要：一等國の教養ある國民としては，外國語を知つておることが，そのたしなみであると思ひます。それによつて知識をひろめるといふことの外，心をひろくするといふことに私は重きをおきます。

2 然り：知識をひろめ心をひろくするといふ目的上からは，外國語として英語を必ず學ばなければならないことはありません。しかし，中學で，いろいろな外國語を教へることは，困難なことでせうから，英語を第一に學ばせることは，今日では當然なことと思ひます。私の經驗では，歐洲語なら，一箇國語に通じさえすれば，他の國語を習ふことは，極めて容易ですから，英語を學ぶこと，あながち差支はないと思ひます。

3 なし：國民的自尊心と外國語習得とは全然關係のないことと信じてをります。之を云爲するのは外國語をほんとうに習得したことのない人の言です。

4 必要：英語を教へるとして，その教授方法には，改める餘地が多分にあります。要は，學生をして自發的に外國語をよむ習慣を養ふにあるのです。そのためには，少くとも現在の教授時間は必要です。

○

清澤 洌

社會評論家

1 必要。

2 然り。

3 語學習得が國民的自尊心と關係ありなどといふことが私には分りません。無學無知の驕慢は自尊心といふべからず。

4 詳しくは知りませんが，これは必ずありと存じます。教育方法の改正が必要です。

5 英語科廢止の必要を見ずと信ずる事前述の如し。但し英語教員が不必要にならば，國策の犧牲仕方がなし。恩給等について考慮すべき事軍縮當時と同じかるべし。

○

佐々木秀一

東京高等師範學校教授，東京文理科大學講師

1 必要：やつぱり外國文化攝取の爲，又進んだ方では，自國語の理解を深める爲。

2 然り：當分は英語第一で行くより仕方がありますまい。それは他の語にすれば，教師にこまるでせう。大都市では，學校に依つて英語以外のものを學び得るやうにするのが便利でせう。然し，一體に英語の日本の社會に於ける狀態には，反省すべきものがありませう。

3 多少あり：今日まではかなり自尊心を傷けたこともあつたと思ひます。これは漢文でも同樣です。これは教師の無自覺から來ることでせう。教師さへしつかりして居れば，この憂がなからうと思ひます。更に言葉其者の特質，讀ませるもの，學ばせるものの思想的內容からは，大に善いものと惡いものとの二面の影響を受けませう。これも教師の指導を要する部面でせう。

4 私は三年まで，大に努力させて，その後は生徒の目的(將來の)と力とに應じて隨意科にするがいいと思ひます。三年まででも進步した方法で，一週三時間は必要でせう。

5 これは一寸妙案が思付きません。

○

日高只一

早稻田大學教授

1 必要：知識を世界に求めよとの明治大帝の御聖旨を奉ずる爲に必要であります。

2 然り：今の場合，一般的には，最も使用

範圍の廣い英語を英國臣の言葉だからいけないなどといふやうな狭量な偏見を抱いてはいけません。エスペラントが遠からず，豫想や空想でなく，實際に於て，英語以上に廣く且つ多く使用せられ，新聞に雜誌に書籍に英語以上に現れ來つて，世界知識の傳達力を顯現するに至り，今日の英語に代らんことを切望いたします。

3 あり。

4 必要。

○

淺野　晃

評論家

1 必要。

2 然り：全東洋諸民族の共通の國語として，當面英語の利用價値はなほ大なるものあるべし，東洋に於ける英國制覇の恥づべき形見とはいへ。

3 あり：現狀に於いては大いに影響あり。されどこれはこちらさへしつかりして居ればあるべき筈なし。

4 必要：時間を減じて能率をよりよくする方法必ずあるべし。

○

大石和三郎

高層氣象臺長

1 必要：1）外國の文化を硏究するため。2）各國民相互の意思を疎通するため。

2 否：從來の如き英語第一ではいけない。英語，佛語，獨語，イタリー語，スペイン語，支那語，エスペラント等，その目的次第による。

3 なし：從來の如く英語第一主義で行くと英語崇拜により，自然と國民的自尊心を傷ける慮がある。けれども學校の種類により種々の外國語を課することになれば，或る特殊の國語を崇拜することにならず，却つて日本の姿を反省し得るの效果がある。

4 中學校を二種に分ち將來外國文物を硏究せんとするもの及び外國に關係ある事業に從事せんとするものの爲のものを特殊中學校とし之には十分なる外國語を課する。其の他を普通中學校とし，普通外國語は殆んど之を課せず，エスペラントのみを課す。商業學校，商船學校には外國語を課す。農業學校，工業學校，女學校，師範學校にはエスペラントのみを課す。專門學校，大學の講義は日本語のみを使用し，外國語を使用せざることとする。

5 各官衙，學校，硏究所等に飜譯通譯課を置き，餘剩敎員をして之に從事せしむ。

○

荒川五郎

日本大學理事，日本大學中學校長；帝國敎育會相談役，全國私立中等學校協會理事長

1 一部には必要：全般的に否とすべきにあらず。外國語敎育の現狀がその目的にあふか否かは本人の基礎精神の敎育如何による。語學は多く精神を支配す。英語を重視して擬英人を作りてはなりません。

2 否：英語を主とするは，精神的に英國に支配せられる結果と，當時諸般の便宜からの事なるも，今日は大に猛省せねばなりません。

3 英語尊重が國民的自尊心への影響は大にあり。日本精神の基礎敎育を完全にし，鞏固なる精神の上に英語文化を利用するやう望む。

4 生徒全部に一律に課する必要は無いと同時に，亦本人の特性長所により取捨する必要あるを以て，私は低學年は同一學科を共課するも，高學年には國語漢文を主とするもの，理科數學を主とするもの，圖書技能等を主とするもの，外國語を主とするものの，四種に區分して共同學科，分別學科を交叉して敎授する仕組にしたいと思ふ。

5 從つて英語敎員も減員を要するものは或は他の科に移り得る者，英語的專門の事業に入らしむる者等，それは實際の便宜に從ふの外なし。原則的に机上論は要なしと存じます。

〔附言〕私は旅行中のところ昨日歸京，明日は亦北海道一圓を巡講のため出發しますので，粗思粗答御諒察を乞ひます。

○

ナカノメ　アキラ

農業，大阪外國語學校名譽敎授

1 否：貴族敎育をほどこす學校の一部を除いては外國語敎授の必要がない。

〔理由〕現狀を見るに，中等學校卒業後，

専門學校，大學を經る者も經ぬ者も，社會に出てから外國語を讀む機會に接するは千人に一人位，また外國語によつて知識を得るなどの者に至つてはまだまだ少い。極めて少數の者のために多數が犧牲になる必要がないと思ふ。

2　否：印度洋北太平洋方面の貿易を目的とする人には英語，中南米貿易を目的とする人にはイスパニア語，東洋貿易目的者には支那語，學術技藝の研究者にはドイツ語，フランス語といふ風に目的に適するものを學ばせたい

3　あり：授業時間數を減じ，高等專門學校等の入學試驗課目よりけづること。

4　必要：外國語授業時數は特殊の學校をのぞいては，一週3時間を越えぬ樣にしたい。

5　一部の敎員には講習をほどこし，滿蒙支那等の日本語敎師とする。

○

小森七郎

日本放送協會長

1　否：中等教育を上級學校への豫備教育たらしむべからずとの見地より外國語を廢し，國民教育として必要なる學課に力を注がしめんとするものは中等教育程度の外國語にては實用的效果なし，上級學校の進入者には其學校に於て外國語に力を注ぐ方が得策と思ふ。私の實驗よりすれば大學出の人々にても大體實用に適する程度の學力を有せず且つ大多數の人々は直接外國語を活用する職務に從事せず，夫れ故外國語に費す勞力と時間を他の課目に振り向くるを利とす。外國文化の輸入の爲めには政府に飜譯局を置き必要有益なるものを選び飜譯せしむるを可とすべし。

3　多少の影響あり。

5　過渡的には已むを得ざる過剩で小生には良策ありません。

○

阿部眞之助

東京日日新聞主筆

1　必要：現狀は目的に合つてゐない。合ふやうに改良すべし。

2　否：英語第一ではないが實際問題として英語教育が主たるものとなるのではないか。

3　なし：教育の致しやう次第なり。

4　必要。

○

井田磐楠　男爵

貴族院議員

私は常に中等教育全般の改革を先づ大學改革に標準を置かんとするものである。大學及び專門學校に於て知識の基礎として英語を不要とするとき，其の中等教育としての英語の價値は確定する。然るときは學問としてでなく，實用語學としての英語の程度を考へる事もあらう。吾人が修學時代に英語の爲に如何に苦しみ如何に修學の時間の大部分を之れに費し，しかも其の英語なるものが一部の人以外には之れが餘り役立つてゐないかは今更論ずるまでもないにも拘らず，今日まで文部省が此の英語に關し無關心であつたのは無責任も亦甚だしいものである。

再び言ふ。余は中學の語學を英語でなければ何語にすべきか等は，大學專門學校に於ける語學の要求程度，語學の種類等に應じて決定すべきものである。

尙ほまた，實業諸學校等に於て語學の種類と程度を決める事が必要である。之亦間接直接に中等學校に影響をするからである。女學校の如き特殊學校を除き全般的に英語と限らず一般に語學を必要としない。現在女學校卒業生が鑵詰，藥のはり紙すら解する事が出來ない。誠に無駄な教育をしてゐるものである。

一々お尋ねの項目には應じて申上げませんでしたが，學校の先生の處置等は國家が眞劍に英語の處斷を考へるときは極めて易々たる問題で其の生活を指導轉換せしめればよい。國家が少々奮發するのである。

○

保田與重郎

評論家；「新日本」編輯委員

1　必要。

2　否：數ケ國語を選び，各々の組を作ればよからずや。

3　なし：自尊心は國力の問題と存じ候。

4　必要：敎員の語學力の向上に合せて，一般敎養の向上いたさば，敎育者の志操と精神

Ĉambro por virinoj

La Memedukado de Virinoj en Hejmo

Mikiko WADA



Se geedziĝo povas esti nomata "Arto", ĝia realigita formo "hejmo" ankaŭ estas unu el la artaj kreaĵoj kaj la gekreantoj, edzo kaj edzino, devas esti nomataj geartistoj, kiuj ĉiam mano en mano kaj koro ĉe koro devas daŭre klopodi dum la tuta vivo, por ke la artaĵo "hejmo", kiun ili duope konstruas, estu pli bela kaj pli altegrada.

La hejmo devas esti ne sole nesto por ambaŭ, kiu protektas ilin de ondoj kaj vento de la mondo, sed ankaŭ pozitive unu el la viglaj elementoj de la socio, kiuj antaŭenpuŝas la progreson de la mondo.

Rigardante ĉirkaŭ ni, ni trovas ke preskaŭ en ĉiu hejmo, viro havas rolon de gvidanto. Kaj dume kia estas la situacio de virino? Ĉu virino, estante edzino, dommastrino, patrino (kaj plie eĉ profesiulino), povas ma ŝi antaŭen kune kun la gvidanto al la celo, plialtigo de la hejmo, eĉ se ŝi havas kapablon kaj emon? Preskaŭ ĉiuj respondus ke ne. Ni ne demandu nun, ĉu kulpa estas la viro, kiu puŝas la virinon en tiun senhelpan kondiĉon, aŭ respondeca estas la virino kiu volonte restas en tiu situacio. Problemo nun staras tiel, ke ni devas ĝustigi kiel eble plej frue tiun staton de la hejmo. Kiamaniere do ni vivu? Mi ne scias bone pri vivo de alilandaj virinoj, kiel ili estas feliĉaj aŭ kiel malfeliĉaj. Mi scias nur la ĝeneralan staton de la japanaj virinoj, kiuj ankoraŭ nun suferas sub multaj malfavoraj kondiĉoj. Mi do volas diri mian opinion pri nia vivmaniero, de la virina flanko.

Antaŭ ĉio estas necese, ke virinoj mem rekonu sian propran forton. Tio estas la sola fundamento por la problemo, mi pensas. La ĝisnunaj

によりて解決さるることと存じ候。

5 教育に天職を感ずる者が殘ることとなるとよいと存じます。現在に於てはあらゆる面で止むない犧牲が多すぎますので，それ故困難なことでせう。しかし教育者には元來他の職業と別な精神があつたと存じ，さういふことを反省してよい時と存じます。

○

丸山丈作

東京府立第六高等女學校長；カナモジカイ評議員

virinoj tro facile rezignis pri sia forto kaj sinaltigo, restante en la humiliĝo ŝajne modesta, pravigante sin per la eluzitaj vortoj "ĉar mi estas virino", kaj neniam montras eĉ dezireton poluri sin. En rutinoj ili pasigas ĉiun tagon kun sia malkontento subpremita kaj neesprimebla, kiu tamen el'prucas de tempo al tempo kaj igas ilin ofte materialo por karikaturo. Tio estas domaĝa ne sole por la virinoj, sed ankaŭ por la viroj, ĉar ankaŭ ili devas ludi komedion kune kun sia edzino.

Due ni devas havi firman kredon, ke la virinoj havas kapablon egalan al tiu de la viroj. Kapabloj de la viroj kaj la virinoj ne estas malegalaj, sed nur la kampo kaj objekto, al kiuj ili estas destinitaj, estas malsamaj. Sekve estas memkompreneble, ke ankaŭ virinoj havas kapablon pensi pri la socio, homaro kaj marŝi al la komuna idealo de la homaro, same kiel la viroj. Kredante t'on, geedzoj iras siajn vojojn al unu komuna celo, kuraĝigante unu la alian. Tio devas esti vera homa vivo, mi kredas. Sed ni ne devas tro memfidi kaj esti maldiligenta. Se ni estus tiaj, ni naskos nenion bonan. Ni devas nutri kaj kreskigi nian kapablon per memedukado.

Ĝenerale en nia lando oni kredas, ke la virinoj necesas lerni nur por edziniĝo. Kaj tial post edziniĝo la virinoj ne emas lerni ion esencan. Se la inklino de la japanaj vir.noj ne estus tia, nia hejmo havus tute aliajn trajtojn. Tamen estas vero, ke oni postu'as al virinoj en hejmo sennombrajn aferojn por plenumi. Tial por ili preskaŭ ne rea'igebla estas la ambicio, ke ili povu kritiki la kurantan politikon, konsideri pri la irado de la ekonomio, interesiĝi pri la ĉefa tendenco de la idea kampo, aŭ kompreni sciencajn problemojn kaj havi scion pri astronomiaj fenomenoj. Ni do ne revu vane tiel altan. Turnu nian studemon al la aferoj proksimaj al ni. En nia ĉiutaga vivo ni havas multajn aferojn, kiujn ni mem devas solvi aŭ plibonigi.

Por konfesi la veron, ankaŭ mi vivis en tiel komplikita okupiteco same kiel la aliaj virinoj, kaj al mi ŝajnis, ke la pasinta tago restigas

---

1 否：我國ハ今滿洲ノ成長ヲタスケ，アジアノ新秩序ヲ確立スルタメニ非常ニセワシクソレニハ日本語ニヨツテ得ラル丶文化ヲ少青年ニナルベク早クナルベク深ク與エル事ガ急務デアツテ中等學校デ歐洲ノ語ヲ教エテ居ル暇ハナイ筈ト思イマス。モシ歐洲ノ語ヲ教エルトスレバ歐洲語ノ準備トモナリ，國際語トモナルエスペラントヲ教エルコトトシ，ソレモ隨意科デヨイト思イマス。但シ外國語學校ハモツト擴張シ，勘能ナ語學者ヲ養ウコトハ肝要デアリマシテ，ソレニハ英語ト限ラズ，國家ノ必要ニヨリ收容スベキ學生ノ數ヲ考慮

nenio.n da novaj aferoj por la venonta tago. Mi estis ĉiam malkontenta kaj maltrankvila pro tio ke mi havas tro malmulte da tempo por min prepari por la plibonigo de la vivmaniero. Al mi ŝajnis, ke mia vivo restas ĉiam sur sama malalta loko sen ia progreso kaj altiĝo.

Ĝuste en tia tempo mi ekkonis Esperanton. De antaŭ longe mi pensis, ke la lingvo estas unu el la plej gravaj kaj potencaj el diversaj aferoj, ke la forto de lingvo estas tiel granda kaj mistera kiel sorĉpovo de sorĉistino en fabeloj.

Kiel granda ĝojo estis por mi, ke mi eksciis nian lingvon teorie racian, praktike utilan, kiu havas altan idealon kaj promesas al ni brilan estontecon. Estis granda plezuro por mi ankaŭ tio, ke mi trovis la grandan nomon de "Zamenhof" ekster la lernolibro de historio.

Studu Esperanton fervore kaj laboru sincere por la afero, ĉar per tio mia vivo estos pli valora, kvankam mia povo estas ankoraŭ ne sufiĉe granda por doni ion al la afero. Tion mi diris al mi kaj mi eksentis grandan ĝojon. Mi eĉ revis, ke mi volonte fordonus mian tutan tempon kaj kapablon al Esperanto, se mi nur povas. Tamen alia voĉo diris al mi, "Se vi sub la bela nomo de studo ne plenumas viajn devojn de patrino, edzino kaj unu el anoj de la socio, vi jam ne rajtus nomi vin perfekta homo. Tia neniel povas vere kontribui al la homaro." Tamen la aferoj de nia lingvo estis tro alloga kaj mia deziro kontribui ion per ĝi estis tre granda, por forlasi nian lingvon, kvankam mi havis multajn taskojn hejmajn kaj aliajn. Por realigi mian deziron mi devis iamaniere trovi tempeton por mia lernado. Tial mi volis ordigi kaj raciigi mian vivmanieron. De tiam mi neniel povas fari ion sen atento, eĉ malgravan aferon, ekzemple, purigadon de teleroj aŭ senŝeligadon de terpomoj. En mi iom post iom pligrandiĝis la emo fari ĉion kun pripenso kaj ofte mi ricevis tute ne atenditan plezuron, kiu naskiĝis de la sukceso de mia penado. Mi trovis, ke en la hejmo ekzistas multe da malhelpoj kontraŭ mia deziro unuigi ĉion ĉirkaŭantan min. Ekzameninte mian vivadon, mi

スベキモノト思イマス。

3 アリ：他國ノ言語ヲ學ンデ居レバソノ國ヲ尊敬スル様ニナルノハ事實デアリマス。從テ國民的自尊心ニ影響ヲウケマス。之ヲサクル法ハ先生ニヨル外アリマセン。山崎闇齋ヤサトレル後ノ山鹿素行ノ様ナ先生ガ教エレバソノ患ハナイト思イマス。

4 エスペラントヲ採用シ，ズイ意科トシテ一週三時間デヨイト思イマス。

5 1. 新ニ養成シナイコト（勿論中等教員）。2. 検定ヲヤメルコト。3. ナルベク他ノ學科ヲ受持ツコトヲ認メルコト（コレハ實力ニヨ

decidis, ke mi forjetu el mia vivo ĉiujn senutilajn elementojn. Sed mi tuj ekrimarkis pri la fakto, ke eĉ se mi estas unu el la plej gravaj membroj de la familio, mi tute ne sukcesos realigi mian supre diritan intencon sen helpo de familianoj. Tre malkaŝe dirite, miaj ĝisnunaj klopodoj nur finiĝis kun tute ne atendita rezultato. Sed la respondeco pri la malsukceso apartenas al mia mallerteco, kun kiu mi agadis, sed al nenio alia. Kontraŭ okazintaj aferoj mi kuraĝe staris por konkeri ilin kaj ili neniel povas forpreni de mi mian fervorecon por nia afero. Tiamaniere mi pasigis miajn tagojn dum la lasta jaro, kaj nun mi kore deziras vivi plej bone mian estantecon por la estonteco. Mi kredas, ke la estonteco estos plej bela, se ni vivas estantecon plej konscience.

Mi parolis supre pri mia propra sperto rilate al mia lingva lernado. Mi deziras, ke en ĉiu hejmo mastrino estu plej studema al kiu ajn direkto, ĉar mastrino havas plej gravan rolon en la hejmo. Kiel mi jam diris, la japanaj virinoj antaŭ edziniĝo estas tre scivolaj kaj preskaŭ sensisteme lernas diversajn aferojn, sed post la edziniĝo ili ĉion forjetas kaj dronas en hejmaj laboroj. Sed ni ne devas esti tiaj. Kvankam tre malfacile estas lerni ion inter hejmaj laboroj, ni devas peni tion. En tiu okazo estas dezirinde, ke la edzo, kunlaboranto de la hejmkonstruado, helpu ŝin aktive, se ne, almenaŭ estu grandanima kaj zorgema pri ŝia penado. Se la edzo kredas ke li estas gvidanto de la edzino, tiam antaŭ ĉio li devas kompreni ŝian personecon kaj ĝin rekonigi al ŝi mem. Sen tio ordonoj kaj instruoj al ŝi estos ne tre efikaj, eĉ se tion li faras kun amo. Estas pli preferinde, ke la edzo mem montru al la edzino sian studemon, kio kredeble faros influon sur ŝin. Entute studado estas tre necesa en ĉiu flanko de la hejmo kaj faras la plej profundan bazon de la geedza vivo, mi kredas. Ni virinoj plenumu niajn devojn kiel eble plej konscience por niaj karaj, sed tra la tuta vivo ni estu ĉiam studemaj por ke nia hejmo estu pli bela kaj alta.

ル事デ必ズシモ免許ヲ持タナクトモヨシ)。

〔參考〕 朝鮮總督府デハ，今年カラ管下大學豫科，專門學校全部ニ對シ入學試驗ニ外國語ヲ廢止セヨト命ジマシタ。コレガ先決問題ダト思イマス。

○

西村伊作

山林業，文化學院校主，校長

1 必要：上級學校受驗準備的な教授法は不可，實用的に簡單に。平易なものを明確に教へること。

2 然り：東洋に於ては實用的に必要。思想及道德上にも英語が最も日本人に適す。

3 なし：外國語の知識なき方が自尊心を失ふし，外國人も外國語を知つた國民を尊敬する。

4 必要。

JAPANA ESPERANTISTO EN BRITA KOLONIO

S. NAKAMURA

Mia esperantista vivo en Hongkong komenciĝis je la 23-a Aŭgusto en 1935. En tiu ĉi tago mi translokiĝis de Miyazaki al Hongkong kiel instruisto de la japana elementa lernejo. De mia translokiĝo preskaŭ kvar jaroj estas pasintaj. Estas vero la proverbo: "Flugas la sagoj, fluas la tagoj." Dum ĉi tiuj kvar jaroj mi spertis diversajn interesajn aferojn, kiel esperantisto. Laŭ mia rememoro mi skribos kelkajn el ili.

Hongkong estas vere internacia havenurbo. La urbanoj estas diversaj en nacieco; kvankam la angla lingvo estas oficiala, tamen ĉiam zumas la japana, ĉina, hinda, portugala, franca, itala, germana kaj aliaj lingvoj en la pramo, kiu iras kaj revenas inter Hongkong kaj Kowloon, urbo situanta sur la pinto de Kowloon-duoninsulo (Ĉina Kontinento). Ĉe tio mi ja rekonas bezonon de Esperanto. Sur strato, en tramo kaj en aliaj okazoj mi tre ofte vidas ĉinojn, kiuj interparolas per la angla lingvo. Mi supozas, ke kelkaj el la legantoj miros kaj diros, "Ne, ne povas ekzisti tia stranga afero, ke samnacianoj devas interparoli en fremda lingvo." La refuto estas prava en nia patrujo, sed ne en Ĉinujo. Multnombraj dialektoj estas parolataj tie, kaj la diferenco inter ili estas tiel granda, ke la ĉinoj tute ne povas kompreni unu la alian, se ili ne loĝas en samdialekta regiono. Laŭ tiu vidpunkto mi kredas, ke nia kara lingvo ludos tre gravan rolon por la ĉinoj en la nunaj cirkonstancoj ankaŭ enlande. Tamen mi tre bedaŭras, ke Hongkong estas kolonio (brita), sekve translokiĝantoj estas multaj, ne restas tre longe kaj ankaŭ iliaj sentoj ne estas stabilaj. Tio malhelpas esperantan movadon en certa tavolo de ĉi-tieaj loĝantoj. Mi do pensas, ke la sorto de Esperanto-movado en Hongkong dependas nur de la ĉinaj samideanoj. Feliĉe ili havis sian Esperanto-Asocion kun 72 membroj. Mi donis al ĝi ĉian helpon, kion mi povis.

Mia esperantista vivo tie havis tre brilan starton, ke mi estis invitita de H. E. A. al teokunsido aranĝita por mia bonvenigo. Partoprenis ĝin preskaŭ kvardek ĉinaj samideanoj, kaj dank' al tio, mi havis momente tiel multajn gefratojn en la malproksima fremdlando. Poste mi trovis kelkajn samideanojn, kiuj deziris lerni la japanan lingvon, kaj komenciĝis inter ili kaj mi interŝanĝa instruado de la japana lingvo kaj la kantona dialekto. Ili kolektiĝis en mia loĝejo ĉiudimanĉe, kaj la interŝanĝa instruado estis daŭrigita tre plezure kaj facile pere de Esperanto. Tio tre akcelis reciprokan amikecon, mi intimiĝis

precipe kun s-ro Ĝolabio. Intertempe okazis la Ĉina Afero, kaj ankaŭ ni devis ĉesigi la instruadon. Post la ĉeso mi ofte vizitis s-ron Ĝolabio en lia vendejo, kaj li akceptis min tre afable, sed li neniam vizitis min. Mi do demandis iam la kialon. De lia respondo mi komprenis, ke la Ĉjang Kaj-ŝek reĝimo malpermesis al la ĉinoj viziti la japanojn kaj skribi al ili. Tamen li aldonis, ke mi vizitu lin, kiel antaŭe; ĉar tion ne malpermesas la ordono. Sed la ordono ne penetris en la koron de ĉiuj ĉinaj junuloj, ĉar s-ro Wong Yuk-ling tre ofte vizitis mian hejmon.

En ĉirkaŭ kvar jaroj mi vidis dek-kelkajn famajn esperantistojn. Kvankam mi havas nur plezurajn rememorojn pri ili, tamen mi ne povas skribi pri ili ĉiuj. Mi do mencias nur tre interesajn aferojn.

Nia lernejo havis unutagan vojaĝon al Macao, portugala kolonio, en Majo de la antaŭlasta jaro. Krom la gelernantoj partoprenis ĝin ankaŭ kelkaj plenaĝuloj. Post trihora veturado sur la maro riĉa je insuloj, ni alvenis la belegan havenurbon Macao kaj vizitis Camoes Parkon. Mia kolego s-ro T. Sakamoto subite proksimiĝis al mi kaj diris abrupte, "Ĉu vi scias, ke tre fama esperantisto aliĝas nin?" Dum momento mi dubis miajn orelojn, kaj mi respondis, "Ne diru ŝercon!" "Sekvu min," dirante li ekiris, do mi postiris lin kun duona seriozeco. Mi estis prezentita al s-ro Kinnosuke Nanba. Unuavide mi rememoris, ke mi prezentis lian vizitkarton al nia lernejestro en la mateno sur la kajo de Hongkong. Ni apenaŭ atendis la finiĝon de la reciproka saluto kaj eksplodigis bedaŭron, ke ni perdis bonan ŝancon de esperanta interparolado sur la ŝipo, ĉar ni povus tion fari, se ni ambaŭ ne forgesus surmeti la verdan insignon. Nur tiumatene ambaŭ ni hazarde ne portis la insignon, malgraŭ ke ni ĉiam surmetis ĝin. Senĉese fluis inter ni esperanta babilado la tutan vojon, en aŭtomobilo, dum paŝado kaj sur la revena ŝipo. Tio kaŭzis famon, ke mi parolas la hispanan lingvon. Iu eĉ demandis rekte al mi, "Kiu estas la nacieco de la sinjoro, kun kiu vi parolis dum la vojaĝeto?" S-ro K. Nanba estis tute fremda por la partoprenintoj, ĉar li estis vojaĝanto el Okayama.

Frumatene la 5-an de la sekvinta monato mi rapidis al la ŝipo por vidi D-ron H. Yagi, ĉar mi ne povis vidi lin ĝis la mateno, malgraŭ ke lia ŝipo alvenis en la antaŭa tago. Kiam mi atingis la ŝipon, li jam atendis min sur la ferdeko. Kun granda danko mi salutis lin. Post la saluto mi rapide demandis, ĉu jena epizodo estas vera aŭ ne: Kiam li studis en la Tria Kolegio, li estis tiel entuziasma en la lernado de Esperanto ke li forlasis la lernadon de germana lingvo. Liaj amikoj, kiuj ne povis resti indiferentaj al lia deflankiĝo, admonis lin. Sed li restis plu entuziasma por la lingvo inter-

nacia, preteratentante iliajn admonojn. Kiam la aliaj havis grandan penon en la universitato por lerni anatomiajn terminojn, dank' al la Esperanto-studo nur li sola estis tute sen malfacilo. Aŭdinte mian demandon, li jesis kun milda rideto. Kaj mi rapidis al mia lernejo, ĉar nur duonhoro restis ĝis la malferma horo de mia lernejo.

Nun mi ŝanĝos temon por kontaktoj kun eŭropaj samideanoj. S-ro F. W. Ebner kelkfoje vizitis nian urbon el Shanghai, ĉar lia ofico rilatis al ŝipo. Ĉiufoje, kiam li venis al nia urbo, li vizitis min. Ni do estis tre intimaj. Li havis multajn amikojn ankaŭ en Japanujo. Estis frusomere en la lasta jaro. Mi estis en la lavejo de "King's Theatre." Tie mi povis rigardi eksteren tra malgranda aperturo de la fenestro; sur la strato multaj homoj preteriris. Tute hazarde miaj okuloj trafis s-ron Ebner inter la preterpasantoj. La distanco inter mi kaj li ne estis pli ol kvar metroj, bedaŭrinde nur la fenestro baris nin. Dum mi malkontente piedfrapis, li malaperis. Ĉu ni ofte havus tian hazardon? Ne, ne, tute ne! Mi pensas, ke tio estas dia petolado. Reveninte hejmen, mi telefone demandis ĉe Y. M. C. A. pri lia restado, ĉar kutime li loĝis tie. Mi ne eraris, ĉar la kelnero kondukis lin al la telefono.

Baldaŭ venis la 21-a de Aŭgusto. En tiu tago mi devis adiaŭi lin, kiu estis sur revenvojo al Vieno. Sur la ŝipo, Conte Biancamano, s-ro Ebner ripete diris, ke okaze se mi havos ŝancon vidi s-ron S. Ŝindo, mi diru al li, ke li jam havas la saman opinion, kiel s-ro Ŝindo, kvankam li antaŭe diskutis kun li pri la nuna afero. Restigante la vortojn kaj koran saluton al la japanaj samideanoj, li forlasis Orienton, kie li loĝis dek-kelkajn jarojn.

Estas fiero al ni havi s-ron F. Braun, kiu venis ĉi tien por presigi esperantajn librojn. Mi ŝuldas al li grandan dankon pro diversaj aferoj, precipe pro tio, ke li tre afable akceptis mian peton—kvankam li estis tre okupita—pri la gvido de trimonata elementa Esperanto-kurso. Por produkti esperantajn librojn, li estis tiel diligenta, ke li eĉ dum dimanĉo ne ripozis. Spite tion, li gvidis tre bonvole la kurson. Faris al mi ĝojo, ke lia kurso esperantistigis s-ron Ryûzi Sugimoto, kiu estas gradigito de Meizi Kolegio kaj havas la diplomon de instruisto de la angla lingvo en mezlernejo. Iam, starante antaŭ geknaboj kiel ilia instruisto, li nepre esperantistigos ilin.

Pro teknikaj kaŭzoj en la presejo, s-ro Braun ja havis multege da peno. Li devis korekti presprovaĵojn tiel multfoje, ke li preskaŭ povis parkere legi la tutan tekston. Se ni scias tian penegon, ni ne devas plendi pri la prezo de la esperantaj libroj.

 Estis la 27-a de Marto en la lasta jaro. Mi ricevis leteron de s-ro Geoffrey

Bevan, delegito de IEL en Wrexham (Anglujo). Mi citos nur kelkajn gravajn liniojn el la letero.

"Mia amiko petas, ke mi helpu lin eltrovi la nuntempan loĝejon de la persono, kiu dum la lastaj kvar jaroj interkorespondadis kun li. Subite ĉesis la interkomunikado, kaj malgraŭ ĉiaj klopodoj oni ne povas renovigi la kontakton. Mi do petas, ke vi havigu informon pri s-ro A. G. Weston—ĉu li vivas en bona sano?—kaj la adreson kien mia amiko povas sendi leterojn al li."

Mi do serĉis la indikitan lokon kaj sukcesis ĝin trovi. Tio estis granda magazeno kaj fabriko de tajloro, kiu situas ĉe 71, Queen's Road Central, Hongkong. Mi vidis la mastron kaj demandis pri s-ro A. G. Weston. Li respondis: "S-ro Weston estis mia tre bona kliento, sed jam de longe li ne vizitas min. Mi do ne povas doni informon pri lia nuna situacio, sed mi estas certa, ke li laboras sur C. P.-ŝipo." Senprokraste mi vizitis la ŝipkompanion, kaj fariĝis klare, ke li estas la ĉefa provizisto de "Empress of Russia." Mi do tuj informis tion per aerpoŝto al s-ro Geoffrey Bevan. Tagoj pasis. Mi ankoraŭfoje ricevis lian leteron en la mateno de la 5-a de Majo. En ĝi li esprimis sian kontenton jene: "Kun granda ĝojo mi ricevis vian respondon al mia peto kaj tutkore gratulas vin pro via sukcesa elserĉo. La nomo de mia amiko, la korespondanto de s-ro A. G. Weston, estas s-ro Hatch. Li estas juristo, kun kiu s-ro Weston kutime negocadis. S-ro Hatch deziras, ke mi esprimu al vi lian sinceran dankon pro via afabla helpo. Li estas kontenta sciante, ke nenia malfeliĉo atakis s-ron Weston, kaj li estas plezure surprizita de la efiko de la esperanta organizo. Li estas tute kontenta pro la sciigo, kiun vi transdonis al mi, ĉar nun li povas senpere komuniki kun s-ro Weston."

Hazarde alvenis samtage vespere la atendita ŝipo. Kaj kiam mi vizitis s-ron Weston sur lia ŝipo por certigi, li montris al mi leteron, kiun li ĵus ricevis de s-ro Hatch. Tiamaniere mia klopodo kiel delegito de IEL en Hongkong havis bonan frukton.

Resume mi skribas, ke Hongkong estas tre interesa urbego ankaŭ por la esperantistoj, kaj mi akcentas, ke vizitu zenhezite nian urbon la samideanoj, kiuj deziras sperti interesan vivon kiel esperantisto. Estas certe, ke nia urbo donas al la vizitantoj sufiĉan kontenton.

Jen alia hazardo!

La redaktoro jus ricevis jenan poŝtkarton de Prof. Yagi, pri kiu skribas s-ro Nakamura en la artikolo.

Genkainada, Aŭg. 21

Kara Amiko!

Survoje al la Kontinento ni kunvivis hazarde kaj interamikiĝis Esp-maniere. Niajn sincerajn salutojn al vi sendas.

Hideo Yagi
Joŝiro Kubo

Ni funebras



故岡崎靈夢氏

病氣の爲谷大哲學科中途退學。大正8年東本願寺にて得度，同14年大僧都に補せられ，堂班，准上廳三等に昇陞，第三印章を授けらる。父君の小樽量德寺寺務に從事。小樽佛教エス會會長。著書エス語譯《阿育王法語》あり。昭和15年7月17日病歿。享年35.

岡崎さんを惜む

6月7日に岡崎靈夢さんが亡くなられたことを聞されたとき，本當に惜しい人を死なしたと云う氣持で一杯になつた。

私が初めて岡崎さんと面識の機會を得たのは同氏の寺院で佛教青年會が創立されたときのことであつた。そのときにはたゞ白面の一好青年と云う感じだつたが，その後交際を深めて行くに連れ氏の良さと云うものが段々深く印象され，心から親しみの持てる人だと思つた。その人柄も高潔で，社交的にも如才なく，しかも情誼に厚い人でもあつた。

私共が岡崎さんと小樽佛教エスペラント會を創立したのは佛教青年會をきつ掛としてである。氏と色々話す機會を得て，氏が谷大在學中エス語を學ばれたことを聞かされ，それではと云うので同志の人人と計り，昭和9年の秋，初めて北海道に於ける唯一のエス團體を創つたのである。

當時の岡崎さんはエスペランチストとしては未だ初歩的であつた。しかし物事に熱心な人だからエス語も短日時のうちにものにし，旣に講習會を指導する樣になつていた。それからとゆうもの，氏のエス語熱は日を逐うに從つて高まり，それは死の直前まで續いたものであつた。小樽に初めてのエス語展覽會を催ほすことの出來たのも氏のお蔭であり，足掛5年，佛教エス會を育んでこられたのも氏の經濟的，精神的援助のお蔭であつた。

岡崎さんのエス語生活のうちで最も華やかな，そして最も活氣のあつた時代はなんといつても《阿育王法語》のエス譯が京都の日本佛教エスペランチスト聯盟から出版された時だつた。海外文通もその頃から初められた樣だ。文筆に秀いていたので新聞，雜誌にも書かれるし，自分の編輯している《慈光》紙には毎輯エス語の記事を載せたものだつた。

岡崎さんが昨年の秋，病床の人になつてからは第一線と隔絕したが，しかしエス語に對する熱意は少しも冷めようとしなかつた。私共が會の用事でお會いするときでもエス語の話しになると全く別人のように元氣付き，私共を驚かしたものだつた。

とも角，岡崎さんが三十五と云う若さでこの世を去られたことは，これから益益多難な道を步まねばならない私共北海道のエス運動にとつて大きな打擊を與えるものと思う。今少しく働いて貰いたかつた，本當に惜しい人を死なしたと云うのが，今私共の一樣に抱いている氣持である。

脇坂圭治

淺野研眞氏を偲ぶ

我が國佛教學界の一方の驍將として全日本の佛教學徒の尊敬を集めていた，新進氣鋭の淺野研眞氏が不幸病魔に冒され，數ヶ月臥床の後悲しくも去る7月7日永眠されたことは，學界のため惜しみても餘りあることである。而して同氏の死は我々エスペランチストにとつても亦大きな損失である。



故淺野研眞氏

明治31年7月25日生。大正12年日本大學文學部社會科卒業。昭和3年7月渡歐，5年までパリ大學文科在籍，諸國視察。昭和11年，外務省文化事業部の補助により，滿洲國,中華民國視察,12年7月タイ國へ佛教使節。全日本佛教青年會聯盟理事。
昭和14年7月7日歿。享年42。

同氏が何時頃エス語を學ばれたものか自分は知らない。しかし同氏は昭和3年から5年にかけて滯歐中エス語を活用されたと聞いている。尤も同氏は他の歐洲語にも仲々堪能であつた。

自分が同氏と深く知るに至つたのは去る昭和9年7月東京で第3回汎太平洋佛教青年會大會が開催された際であつた。同大會はエス語を公用語の一にしたが，この決定なども布哇における第1回大會の決議によることでもあろうが，好村春輝氏(當時佛青聯盟主事)や淺野氏，友松圓諦氏，小谷德水氏あたりがこの決定に何等かの推進力となつていたのではないかと思う。

淺野氏は同大會で私にむかつて佛教界に大いにエス語を活用しようじやないかと力强い言葉を述べられたのであつた。

その後間もなく同氏は全日本佛教青年聯盟の中に新設された國際佛教通報局の幹事となられ，月刊『國際佛教通報』の編輯事務に當られ，その創刊號（昭和10年4月發行）に何か書くようにとのことで，自分は Budaismon per Fsperanto とゆうエス語論文を寄稿した。(同誌は英文で編輯）その後每號エス文を一篇位入れてくれた。柴山慶，中西義雄，竹内藤吉の諸氏が寄稿された。

その後同誌に淺野氏の著書『佛教社會學研究』の卷頭の一章「佛教社會學の基礎概念」とゆうのをエス譯して連載することになつた。

佛教社會學とゆうのは同氏が初めて提唱し世に問うたものであるので同氏自身もこれを最も學的の著述と目しておられた。それで右の雜誌に連載のエス譯は後に一册にまとめて Fundamentaj Konceptoj de Budaisma Sociologio として出版され，歐洲エス界に發送された。

このエス譯が誌上に連載された時譯稿の術語その他についていろいろ御相談があつたので自分は每月一回以上佛青聯盟へ同氏を訪問したのであつた。

その頃同氏は佛教學院とゆうのを經營されていたが，そこでエス語の講習會をやりたいといつておられたが，その後滿洲やシャムに行かれたりして甚だ多忙のためこの話はそのままになつていた。昨年は支那へ行かれたようであつた。

同氏は京都だつたかで開かれた日本エス大會の佛教分科會に出られたこともあり，昭和10年の名古屋の日本エス大會では教化會館での普及講演會の講師として來名され「エスペラントと佛徒」の題下に熱辯をふるわれた。

同氏は見るからに蒲柳の質で時々病床に親しまれていた。しかも同氏は才氣渙發口八丁手八丁とゆうも過言でない，實にエネルギーアな人でドシドシいろんな著述を發表されていた。

少壯有爲大いになすあるの天稟をもたれた同氏が若くして逝かれたことは何といつても惜しいことだ。我がエス界の爲にもまだまだ大いに働いていただくことができたのだと思うとまことに遺憾にたえない。

ここに同氏を偲び御遺族に對し深く哀悼の意を表明する。 岡本好次

中等教育における外國語問題の再檢討

II

エスペランテイストはこう考える

外國語教授は必要である

姫路高等學校教授　多田齊司

"日本語をローマ字で，日本式のローマ字で"と歌う仲間に加わつてから23年，"日本人には日本語で，外國人にはエスペラントで"と端書や封筒に刷つて使うようになつてから22年とゆう長い年月が私の上にすぎていつた。

かくて日本人 dôsi は Rômazigaki Nippongo を使い，外國人に對しては Esperanto を使つて Yô wo tasu と同時に，日本語を Rômazigaki によつて外國へも csihiromeru とゆうのが，私の長い間の希望であつたが，今では，以前にも增して，Rômazi Nippongo が日本人の間ばかりでなく，外國人に對しても使用さるべき日の一日も早く來ることを待望している。

この心の持主が，"中等學校の外國語を如何に取扱うべきか"とゆう問題を與えられて，isasaka mayotta のである。

我々日本人は，字訓の全く或は殆ど不明な文字が zurari 並んだ新聞紙を毎日見せつけられて，中等學校で 5-60%，大學で 7-80% の近眼を作る大きい原因をなして居る一方，Radio では，村岡花子が"八幡様の Kei*nai*"といい，德川無聲が"裏山から水を引く Ka*kei*"といい，ラヂオ小說"野戰病院"の放送者が"Ho*ho*"だの"Hono*ho*"だのと言つたりするようなのを syottyû きかされている國民なのである。

まだまだ國語意識が皆無だといつてよい日本人に，日本語に對する關心を高めてやることは依然として，二十餘年の昔と同樣に，喫緊の急務であらねばならない。Radio で堀英四郎の基礎英語をきくと，E'go は 90 點以上でも，その日本語は 70 點もどうかと思う。

私は，katue，度々，中等學校の英語廢止を，口にもし，筆にもした。これは外國語を排斥するのではなく，ドイツ協會とか，曉星校とかゆうような，幼稚園から外國語を叩き込む學校も必要であるが，日本國民全體が，英・獨・佛語に惱まされるべき suziai のものではないといつたのである。と同時にまた高等學校の教授要目には，言語學の一科を加えねばならないことを主張したのである。

問　題

たとえば，つぎのような問題について，なるべく，國民の將來とゆう大局的な見地から

1. 中等教育における外國語は必要かどうか，その理由。
2. 現在，その外國語が，特に英語を意味するものであることの批判。
3. 中等教育にエスペラントを導入するとすれば，その目的，方法，導入の具體的手段。

私自身35年間 Eigo を勉强し，人にも敎えて來た keiken 上，且又，最近歐米各國を巡歷した體驗に照らして，以前，長い間抱いていたやうな，單純極まる机上の空論でなしに，世界の實狀をも加味して，要するに，中等學校では"外國語を課する必要がある"と私は信ずる者である。それは，今日のように英語を毎週5時間から7時間 tatakikomu のではなく，言語學のような形式でもよい，英

語でも，ドイツ語でも，フランス語でも，イタリヤ語でも，支那語でもよろしいが，その何れか一つ，又は，その中の二三を選ばねばならない。一國語につき，200 の單語と數十の單文とで結構である。口と耳とで wakaru Kotoba を教えるがよい。そして比較對照することによつて，日本語に對する ikita Kyôiku を施さなければならない。それは若ければ若い程よいであろうけれど，世界に於ける日本の現狀とゆう實際を考慮して，少くとも高等學校より若い中等學校に於て果さなければならないと思うのである。

Esperanto が前記の外國語の中に加えられて，何れか一つ，又はその中の二三といつたものに數えられるのには，國際關係がそこまでそれを引上げてくれた時から始まること勿論である。

心を虚しくして語れ

芝中學校教諭　山　崎　弘　幾

滿洲事變，支那事變を契機として，いま日本は國際的に國內的に政治，外交，經濟等々あらゆる方面に一大轉換，展開が要求されている。

興亞の大業と云い，東亞新秩序の建設と云い，生やさしい改善や御座なりの覺悟で出來る事ではないからである。そこで世の中には各方面に現狀打破，新局面打開の工作や努力が續けられているが，一方には又單なる懷古主義的な思想が底流をなして凡そ改革からは遠心力的な存在として頭を擡げている事も見られるのである。改革の難かしさは何時の世の中でも變りはないのである。

自分の職掌柄，教育の方面を見るに一大改革を要すべき事が澤山あるが，とりわけ國字國語の問題と外國語の問題は一日も早く思い切つて大改革をしなければならぬと思う。もし此の儘に放任すれば國家の大損失であり，日本の推進力を半減させるゆゆしい問題だと考えるのであるが前者は此處で取上げるべき問題でないから省いて，需められた中等教育に於ける外國語問題に對する卑見の一端を述べて見たいと思う。

先ず第一に外國語は日本に必要かどうかと云えば，それは勿論必要である。けれども必要なことは世の中に澤山あるのだから此れをどの程度に，どんな風に取り入れるかゞ問題なのである。そこで之を中等教育と限定して見ると，私は概括的原則的には不必要だと云わざるを得ない。併し商業學校の樣な所では多少話すとか書くとかの土臺を教えてもよいし中學などでも將來の基本程度には惡くないから1週3時間程度の授業は許してよかろうと思う。只今の樣な全授業時間の3分の1も英語に費し，しかも上級學校の入學試驗の難關である所から實際に中學生などが英語に費す精力は全力の半以上にもなつて居る狀態を目擊する吾々は何とかして早く之を打破しなければ，將來の日本を擔うべき青春を毒し，國家百年の大計を誤るものとして大聲疾呼せざるを得ないのである。勿論明治初年以來，我國は歐米の文物を吸收するのに急で何を放擲しても先づ外國語を學び之によつて短い年月の中に急速の進步を來したのである。その時代にあつては外國語を能くする者は優位を占め立身出世の緒でもあつたから自ら進み希望を確實に睨んで猪突したのであるが今は全く事情が異るのである。明治初年時代には學校の數も少く中等學校以上に學び得る者は選ばれたる少數者であり，今の樣な國民教育的色彩よりも特權味豐かな人材教育的色彩に富んで居り，本人としても惠まれた矜持の上に時代の波に乘つて彼岸をめざすには苦痛を感じなかつたのである。

今も猶此の時代の夢を追うて中等教育から過重の外國語を擁護する人達がありとすれば，時代認識の缺けた愚論と謂わざるを得ない。

然らば議論を本道に旋して今假に中學校に於て外國語が1週3時間以内に減ぜられたとすると，それに附帶して改めなければならないのは先ず單位である。今まで英語科を分けて，譯讀・文法作文・習字及書取會話などと3單位にもしてあるのは不必要と云うよりも他の學科との關係上弊害がある。それで之を1單位として英語ならば「英語」と云う1單位にすべきだと思う。そして中學の如きは譯讀を主として他は之に附隨的に取扱うことを主張したい。商業學校の如きで，會話・作文を主としたければ他はそれに附隨させればよいであろう。

論者或は云うであろう。現在の如く多くの時間を費し鞭ち鞭つてさえ5年間に得る所何もないのに，そんなに減じて何を得るか，然かも君は外國語は日本に必要だと云う。得る所寡きものを持つて之を必要に展開する方途如何と。

之に對して私は答へる。1週2時間の授業を以て外國語に堪能な者，好きな者は相當に學力を伸ばすことが出來る。假令學力の程度は低くても自分は此の方面に向くと云う信念は附く。その自信ある者は自ら荊棘を開いて修めようとするのであろうから，國家なり府縣なりは土地柄に應じて，外國語の學校を作り中等程度，專門程度の課程を置いて有志者を收容するが宜い。これは短期速成をめざし，入學を簡易にし，中等學校に進み得ない小僧でも番頭でも入り得る學校であるのも宜しかろう。その爲には，晝間の學校に併設に夜間授業とするのもよいであろう。

何してもこれは自ら進んで修めようとする篤志家だから，うんと鞭うち學力を進める方法をとり必ずしも年月によらず試驗制度で級を進めるがよいと思う。

兎に角，種々の程度の此の種の學校が出來るとすれば，數十萬の中等學生に今まで無意味に失わせた學力は潑剌とした形に於て國家に酬いられるであろう。

最後にこれとは別に中等學生そのものの外國語の學力を進展せしめる重要な方策がある。その結論を云うと，中等學校にエスペラントを導入することである。試に1週2時間2ヶ年間を之に充て，3年以上に英語なり他の語學を充てゝ見よ。必ず5ヶ年を通じて授けた學力以上のものが得られるのである。これは外國に於て既に試驗濟であるばかりでなく吾吾はエスペラントの講習に携つて自信を以て此の事を云い得るのである。何故にそれが可能かを疑う者は，行きがゝりのつまらぬ蔑視や誤解を捨てゝエスペラントの本質を探つて見よ。そこには西歐語の基礎として重要妥當コンクリートの如きものを見出すであろう。その上の建築は各自の好みに任かせよう。今迄云い漏した女子中等校の外國語問題もエスペラントを課する事によつて解決するであらう。

今や日英會談は決裂し，日米通商條約は破棄され，防共協定影薄れて獨ソの條約新なるを聞く時，誰か一個の生活の爲に舊制を猶良しとするか。國家の爲に心を虛しくして語るべき秋ではないか。

わき道の値打と作法

イシガ　オサム

 中等學校の外國語問題について私の言いうる所は，責任のない位置にいる1エスペランチス

トとしての私見にすぎない。

中等學校における外國語が問題とされるのは，ニッポン人の教育はニッポン語でやればよい，何も外國語を習う必要はないとするいわば思想的根據にたつ意見，及び，外國語學習の價値は否定しないが實際に効果をあげていないし又あげさせ得ぬから，これをよすか減すがよいとするいわば技術的立場に立つ意見——この二つに基くことが多いように思はれる。そして外國語が問題とされる時には專ら消極的・否定的觀點から論ぜられるのが常らしい。

こゝで私はエスペラントの思想的根據を顧みて見たい。ごく常識的な見方ではあるが，國際的な問題を取扱う立場を分つて三つにすることが出來よう。卽ち現在の國民 (nacio) とゆうものの否定の上に立つ Sennaciismo；現存の國民の絶對化を要求する Naciismo；現在の諸國民の共存共榮を目ざす Internaciismo の三つ。* そして過去ならびに現在に於てエスペランチストがもつぱらこの最後の主義に立つものであつたし又そうでなくてはならないことは明かだ。いやエスペランチストのみでなく，現在のシナ事變を斷じて帝國主義戰爭たらしめず，協同體の名を以て稱えられる東アジアの新秩序建設の序曲たらしめようとするニッポンの政治もまた同じ方向を目ざすものと言わなくてはならない。たとえ完全な Internaciismo の世界の出現はなお未來に屬するとしても，今ではこれに基かずしては世界に國をたて得ないのが實狀である。

この立場から中等學校の外國語問題を眺めると答はおのずから明かである。卽ち狹義の國民教育**に妨げとならぬ限り外國語の學習はますます奬勵すべきものだ。これによつて國際的理解を深め得ることは確かだし，國際的理解は Internaciismo の成熟の大切な條件だから。又それだけでなく狹義の國民教育の一部としても外國語教育は必要である。いい古された事ながら，外國語に接することによつて始めて自國語の姿をかえりみることができる。國語問題としてのローマ字論發展の經過はそのよい實例である。

ところで實際問題として言えば，狹義の國民教育を妨げぬ範圍で外國語の有効な教授をなすことがかたく，だからこそ技術的見地からの外國語教授否認論が絶えないのであるらしい。そしてこゝに諸外國語學習の段階としてのエスペラント登場の門戸が開かれる。

これに關する 1935 年 9 月の La Revuo Orienta 特輯號を見ると，諸家の意見は，現在の中等學校の最初の 2 年もしくは 3 年間にエスペラントを課することによつて外國語學習能率を大に高めることができるとゆう事に一致しており，現在に至るまでエスペランチストの側に於てこの見解に何ら變更の必要を見ないようだ。問題はたゞこの見解を一般に是認せしめ採用せしむるにある。

然しこゝでエスペランチストの注意しなくてはならないことは，エスペラントをこうした見地から扱うことは決してエスペラント運動の本道でなく，たゞ方便的なわき道にすぎぬことだ。上の雜誌に當時カナザワ商業の 2 年生の越野芳雄君が書いている「いずれにしてもザメンホフ博士がエスペラントを創造したのは，英語其の他の外國語習得の便宜を計る爲でなく，世界の平和を計る所に目的があるんですから，我々は今ではエスペラントを英語習得の爲に利用するなんて小さな考をすてゝ，大いに外國通信をやつて他國の同志と固く手を握つてその目的達成

---

*（ニッポンでは Sennaciismo が一般の問題となつたことがない爲に，この概念に對する十分な認識がなく，從つて Internaciismo の概念の一部を「國家主義」のうちに含ませたり，又 Sennaciismo の概念の一部を「國際主義」に含ませたりしているようだ。だからこゝでは誤解をさける爲に特に Esp. を使うことにする。）

** 國民に國內生活で必要な教養を與える教育。鎖國時代にはこれを以て事たりた。

の一助とせねばならないと思つて居ます」とゆう意見は，中等學校の外國語を論ずる場合に大に傾聽の要がある。たゞエスペラントの理想は人類の現狀からおして100年や200年の近い將來に實現されるようなキボの小さい理想とちがうので，それ迄の過程にはわき道に入ることも許されるし又必要な事もあろうとゆうにすぎない。

ところで，わき道を行く時にはおのずからわき道の作法がある。外國語學習の階程として要求されるのは國際語エスペラントよりも寧ろ人工語エスペラントであり，これの導入の問題はエスペラント運動よりもむしろ英語（その他の外國語）教授改革運動であることを先ず承知していなければならない。從つてその主動者たるべき者はその外國語の教師たちであり，エスペランチストはその協力者の地位にたつのが本筋だ。この點の認識と，その認識に立つての準備が今まで不十分のキライはなかつたろうか？たとえばエスペラントの言語的性格をのみこませる爲にいる最少限の單語數やのちに習う外國語と關聯しての語彙の研究；この方面での實驗（たとえばトウキョウ府立第六高女でのそれ）の資料を集めその教育的見地からの報告を世間にひろめる努力；同様な實驗をより大きいキボで公に行われるように運動すること；なかんずく諸外國語の教師に對してこの實驗が決して彼らの生活を脅すものでない事をしらせ，彼らの立場からの積極的參加を勸誘すること，など。この實驗にあたるにはそれらの外國語教師たるエスペランチストが最適任であることを思えば，徒に英語排斥などを叫んで彼らとの間に感情的對立をきずくのは極めてまずい事だと思う。（これはモチロン今の中等學校におけるイギリス語偏重を是認するものではない。）

要するに本道は本道，わき道はわき道。わき道をゆく時にはわき道の作法によることが目的に達する上に有利だと思う。なお諸外國語にかえるにエスペラントを以てせよとゆう本道的主張に敢てふれなかつたのは，その機が未だ熟せぬ事を顧みてのことである。

中學校へのエスペラント導入の第一歩

栃木縣立眞岡中學校教諭　**比留間恭平**

中等教育に於て外國語を課することは是非共必要であります。それは社會が教養の上からも，實生活の上からも要求して居るからです。

現在中學校では1週7時間内外の英語學習時間を課して居り，正課として最も時間數の多い課目の一つであります。それで生徒の成績不良者の 99% 以上がその不良成績科目の中に共通に斯の英語を持つて居ります。

上級學校で英語を重要視して居るので自然その入學試驗に於ては重要科目として加えられて居り，そのため中學校で過分の時間を之に割き，尙も不足を感ずるとゆう有樣である。こんなに外國語，特に英語を課さねば文化程度の高い國民を造り得ないのであろうか。

兎に角この現狀を改めるには現在の學校制度，むしろ習慣を根本より變える必要がある。特に昨今の如き時局，この狀態は今後相當長期に亘つて續き，それのみならずこの狀態が停止するとき，卽ち新東亜の建設が完了される曉には今とは全く打つて變つた世界となるべきことが想像されます。旣に日英東京會談が日本語で行われているとゆう有史以來の出來事が眼前で實演されておる今日です。最早外國語卽英語，英語卽外國語とゆう御維新當時の世界，日本でないと信じます。でもローマ字で書いてあるものはすべて英語としておる輩が大部分であります，

惰性は恐しいものです。現在吾々の日常語に入つておる歐米語の大部分が英語であるのを見るとき止むを得ないことです。

大學，專門學校を出た者の大部分が外國語の文献を讀むことの必要あることは恐らくありますまい。何のための外國語であるか，必要以外の別の原因でかくも手のつけられないようになつたものであろう。この嵩じた病を治すには相當手間取るでありましよう。

上述のように外國語卽ち英語である時代の考え方の惰性が昭和の今日にまで續くとは實に驚くべきことでありますが，之につきては他の方々より論ぜられることでしようから，次に中學校へエスペラントを導入することに關し愚案を述べさせて頂きます。

吾々がこの導入とゆうことに於ていつも困ることは第一にこの言語が餘りにも若齡のためか文化的背景の少いことであります。これは一朝一夕で豐富な文献，著作を與えることは出來ないでありましようが，又之を多くするには，どうしても斯語を研究する人が多くなければなりますまい。その第一條件たる人的資源が必要なのでありますので，それには中等學校で之を養成することが最も捷徑なりと信じます。第二には，英語科教師の認識不足であります。エスペラントの國際語としての優秀性を彼等のすべてが認めて居るようですが殆ど斯語の眞の姿を知つていないようです。又地方の英語教師は，大變失禮な言分ですが，今迄の惰性で動くだけで新しい流に少しも棹を入れることをしない。私は英語科擔任でありませんので深い内幕は知りませんが，どうもそのようです。すべてこれは教師のみの責任ではなく，學校制度の前述の膏肓に入つた病に原因するのでありましよう。

中學校では，英語の難物なることを理解し始めるのが大體第3學年頃からのようで，この頃時間の相間に一寸エスペラントに話がふれると，たちまちにして英語全廢の聲が湧出すのです。この一事を觀ても確に英語がむずかしいもので，寸利のない苦痛を生徒に與えていることが知られます。

エスペラント導入には，どうしても英語教師に働きかけることが必要であり，之で十分であると考えます。學校の方針として譬え隨意科目として導入するとしてもこのことは是非必要です。エスペラントの教師がそのまゝ英語の教師であれば現在の英語教師の生活に少しの不安も與えないですむことは明かです。

エスペラントを英語時間の一部に挿入するとき，決して生徒の負擔を增さず，むしろ現在より輕減され，且つ多大の利益を齎すことが豫期されます。周知の如くエスペラントを習得して居れば，英語を中學校で習つたより現在に於てさえ，どれほど役立つか知れない。このことを英語教師とゆう方々は少しも御存知ない。勿論中には相當多數の方が，之を理解しておられるが，現在の制度上止むを得ないのを歎じられておる。しかし大部分は採るに足らない愚論を吐くのである。

現在のまゝの形(制度)では，希望者を募り，第3學年あたりから教え始めると大變能率がよいものと考えられます。それは英語(外國語)の基礎が相當出來て，その難物なるを知り始め，新規なものに對して相當魅力を感ずる時期であるからです。エス語の力はこの程度の英語の力にはすぐ追いつけます。少し席次の上の生徒では實に上達が速い。第一種，第二種制（4年から分れる）のあるところでは，第一種生に對して行えばよいのであるが，事實上どこでもこの組へは劣等者が集るので一寸困る。又將來を考えると第二種生(受驗組)に行うのは更によいが，受驗の爲の英語に追われて，これも特別の能力を有するものでないと期待がうすいと思います。それで3年から始めるところの受驗英語の學習にも相當の利益を附加する程度にまでエ

ス語の力を附け得ましよう。

以上は誠に消極的考え方ですが，目下の學校間の關係を生かし，又之を利用して導入する一案でして，淺薄，菲賤な考えですが，御參考になれば幸いです。

結局現在のところ正式にエス語を導入するには斯語を識つて居る人が尠い。英語科教師の斯語に對する見識を擴大し，改めることが急務。現在のまゝでは第3學年(理由前述)より英語教師の諒解を求めてその英語時間の一部を之にあてるか，放課後行うかして，實績を具現することがよいと考えます。

目下の急務

智山專門學校講師　渡邊照宏

外國語學習は是非必要　一國の文化が進展する時は常に外國文化と緊密な關係を持つ。獨り我國のみならず偉大な文化の果實を結んだ國は他の諸國の精華を受納し同化するか，若しくは進んで此を反撥することによつて自國の萠芽を助長成熟させたのである。自國の固有文化が餘りにも貧弱な場合には往々他の爲に全く壓倒され文化的屬國の地位に甘んじなければならなくなる場合もあるが，苟も確固たる國民思想の中心を有する國家ならば敢て自ら進んで國際場裡に自己の文化財を曝して更に磨をかけなくてはなるまい。我國に於ける外來思想は古來の佛教儒教を始め近代の西洋文化に至るまで，悉く自家藥籠中の物となして全く同化して國民の日常生活の中に取入れ之の間に我と相容れないものがあれば排泄している。加之現在としては我國の文化を進んで海外に紹介することが目下の急務となつている。國際的に實力を示すには一には之の文化財による。諸外國が我國の文化事態に甚だしく無知であることは最近になつて今更の樣に驚かれているが，正確にして詳細な紹介を怠つたのは誰の責任であるか。理想としては日本語を世界に普及させねばならないが，此爲には日本語を學ぶことによつて彼等が如何なる利益を得るかを先ず知らせなくてはならない。此事は唯に少數の「選ばれたる人々」の手によつてのみでなく，少くとも知識階級の各人が其々手を盡すことが必要である。現下の事態に於いて中等學校否之れ以上高等の學校の卒業者が自國語以外では意見を發表し又は自國の文化を紹介する手段を有しないとは何と不便なことであろうか。外國語の知識を全く缺くことは自國語の發達をも阻止する。己の家庭より外に出たことの無い者には我家の眞の善さが解らない。自國語以外で思考することの出來ぬ者に自國語の長所が解らない。例えば今日のドイツ語を完成したものはルッテルとゲーテであると言われるが此二人は何れも外國語に理解を持つた人である。此意味から見ても國語の發達を指導すべき知識階級は是非とも外國語に對する理解を必要とする。但し中途半端な外國語を學習しそれで足れりとする人には母國語に對する認識を誤る場合も生ずる。能文家として知られる文壇の雄が「誰か切符の切つてない方はありませんか」とゆう日本語の表現を文法的に正しくないと論じ同じく文壇の大家が此に同意しているような滑稽な誤解などは半可通な外國語の知識を國語に强制しようとした一例である。(「切符の切つてない方」は直譯すれば por kiuj la biletoj ne estas truitaj で國語としては por kiuj は略するのが原則である。)かくの如き誤解は外國語を正當に理解すれば，生じ得ない筈である。否寧ろ此事實は現在の學習方法では外國語は勿論國語さえ充分に認識するに至り得ない一例と見ることができる。生半可な外國語學習は斷じて不可である，外國語は是非充分に學習しなく

てはならない。

外國語の選擇 現在我國では外國語と言えば英語と考える程にアングロサクソンの國語が普及されているが，之の効果はどうか。中等學校卒業生は固より，十年の星霜を費した筈の大學卒業生の何プロツェントが此を實用に供すことが出來るか。如何なる英語萬能論者でも此事實を否定することはできまい。勿論この責任の一部は現在の教育方法にもよるが實に英語そのものの持つ特質にもよるのである。凡そ外國語學習には二つの困難がある。一には自國語を離れて思考することの困難，二にはその外國語の持つ歴史的複雑さである。此中第一の困難は獨り英語に限らず，如何なる外國語にでも（エスペラントでも）附纒う厄介さであるが，此は（特に年少者）の頭腦の訓練として極めて有益である。（例えば最近まで歐洲の諸學校ではラテンが之の目的に使用された。）併し第二の困難は特に一定の國の文化に興味を持つ者でない以上に勞して益が少い。すべての自然語はその國語自體としては歴史的必然さを持つとしても他國人には偶然の惡戯としか思われない樣な複雑さ，非論理的な表現方法がある。若し英國に居住するか英國人とのみ話すことにしたらば，その歴史的殘存物は極めて自然に見えることになろう。こうすれば英語が第二の母國語になるわけである。併し我國の事情としては學生生徒がこれをどこまでも外國語として學ぶのである。隨て非論理的表現は何時までたつてもぎごちなく感ずるのである。國民道德を學び國語を學び國史を學び自然科學の手ほどきを受ける中等學校の生徒にその上この負擔は無理ではなかろうか。外國語學習が必要であるとしてもせめて此第二の困難を第一の困難と併せ苦しむ現狀から解放する方法が無いであろうか。それこそエスペラントだ。エスペラントは言うまでもなく論理的であり且つ情操的な語法を持つ。若し我國の中等教育に此を課するならば現在の英語學修の半分以下の時間で完全に修了し得る。（我國の立場から見た外國語學修の難易の程度を知るには手近い所では白水社の第一歩叢書の各國語を比較して見よ。）餘分な勞力を費して役にも立たぬ程度しか學べぬ英語と僅かな時間で完全に習得できるエスペラントの何れを採るべきか。而も若し全國の中等學校卒業生がエスペラントを實用に供し得るとしたらば我國文化の海外宣揚に直接間接に如何なる好結果を齎すかは期して待つべきである。その上この國際語の普及によつて我國語の長所短所が明瞭に意識され健全な國語の發達に貢す點に關しては殆んど論ずる餘地があるまい。

國民的矜持と外國語學習 一定の外國の國語を學習する際に動々もすれば外國崇拜の弊に墮り易い。但し此事は輕薄な人士にのみ見られることであつて眞の研究者に於いてはあり得ないことではあるが年少な子女にあつては全く此は杞憂ではない。元來國語はその國の文化と不可分なものであつて英語を好む者が英國人に媚を呈したがるのは人情であり又語學研究とゆう立場からはそうなくてはなるまい。英語に上達せんとする者は宜しく英國人を崇拜しその擧動をすべて模倣するがよい。それが學習の近道だ。佛獨みな同樣である。特に英國の歴史，英國の政治經濟，英國の機械工學等々を學ばんとするものがその國語を學ぶべきことは固より當然であろうが，「一般教養」として此に多くの精力を費し此に隷屬的に感ずる必要が何處にあるか。筆者は印度人と相談事に英語を用うる必要のあつた際に寧ろ息苦しさを感じた。此に無神經で居られる日本人があれば何をか言わんやである。筆者は語られる場所により卽ち日本に於ては日本語を，英國にあつては英語を用うることを理想と考える。止むを得ない場合は中立語で間に合わせるがよい。（嘗てあるドイツの大學教授がドイツの鐵道内で英語新聞を讀んでいた。居合せた英國人が Do you speak English? と尋ねたに對して Nein! とどなつたとゆう。）遠慮は無用。日本人に來る外國人は日本語を習うべし。短期滯在ならば止むを得ないから此方でも中立

語まで歩み寄ろうではないか。

エスペラントの普及方法 將來に中等學校に於ける自然語の外國語を全部廢止し，現在の半以下の時間數でエスペラントを學ばせる。此で國民の中樞部分は對外的交涉手段を持つことになる。高等學校大學豫科で始めて英獨佛其他の中の一國語を學ばさせる。現在の如く英語5年間の學習後3年間で獨佛語を學ばせることから見てもエスペラント修了後ならば大學で必要なだけの自然語は3年で充分に出來る。此が理想案であり近い將來に是非そうさせたいが直に實行出來る方法としては次の如く考える。第一。高等學校大學豫科入學試驗及び各種の採用試驗の外國語としてエスペラントを認めること。此さえ實行できれば學習容易で便宜なエスペラントに追々移つて來ることは自然の勢である。第二。中等學校の初年級でエスペラントを採用し中途から英語を加え初年級から英語のみを學んだ者との優劣を比較する。此もエスペラントの機能を實驗的に證明することが出來よう。第三。女子中等學校及各種補習學校では即刻エスペラントのみに改めること。其他對社會的には色々の方法があろうが，學校關係としては以上の3項を第一歩とすべきであろう。併し更に根本問題として中等教員諸氏の協力を是非必要とするので，此方面で大に考究すべき點があろう。

反對論の吟味 反對論者は言う。「日本でいくらエスペラントを學んでも外國人の使用者は少いから無益である。」此に對してはこう言いたい。筆者の聞知している範圍だけでも「日本に行くから少し英語を習つておこう」と言う歐洲人が數人あつた。若し此が「日本に行くからエスペラントを」に變ればどれだけ彼此の便利が增すことであろう。日本人が交涉を持つて彼此 利する歐米人，又は日本に來よう，日本のことを勉強しようといふ程の歐米人ならば，自國語の他に少くとも何れかの外國語を知つている場合が多い。その人がエスペラントを學ぶことは極めて容易である。「日本では中學生でもエスペラントだけは知つている」とありたいものである。英國人や獨佛人よりも我々の方が中立語を提唱するに都合よい地位にあることは永田秀次郎氏も言つて居られる。日本を英語國（而も話すことも出來ない英語國）にしたのは誰の責任であるか。通信によつて特殊題目に就いての資料を蒐集する段になると，現に世界のエスペランチストには各方面の知識階級を網羅しているから，一自然語によるよりも數等の効果が擧げられる。此點から見ても使用者の數よりは實質を考慮すべきである。反對者は又言う「中立語は不自然な言葉であるから教育上面白くない。」此に對してはこう言う。英國人と話もせずそれで書くことも出來ない間は英語と雖も不自然であり作爲的な感じをしか懷かせない。而もエスペラントが人工語であることは周知の事實である。「專門研究の役に立たぬ」と言う反對もあろう。成程エスペラントの專門文献は今日では尙少い。（實際は漸次その數を增し次第に整いつつある。）だからこそ筆者も大學教育の準備としては尙暫定的に自然語を課すべしと言うのである。併しそれ以下の程度で現在學修している自然語がどの程度に役に立つているか。且又始めから外國語とは變な物とゆう頭で習つている現在と，前述の如く困難の克服を二期に分つのと何れが專門研究書の讀書力を附けるであろうか。而も前述の如く直接海外のエスペランチストとの通信によつて專門資料を集めると云う段になると到底自然語の比ではない。更に反對者は言うであろう，「エスペラントは歐洲語の基礎の上に立てられたものであるから東洋には東洋的な國際語を必要とする」と。誠に尤もである。東洋的な國際語が出來れば我々として此に越したことはないと思う。併し東洋のザメンホフの出る見込が當分はなさそうなこと，又實際問題として種々の語系が錯綜している東洋諸國語から一の國際語も形成することが困難なこと等の事情が存する以上，且言語學上の問題であるが將來試み得る人工語は悉くエスペラントを基礎

にしてのみ可能であるとゆう學者の推論から見ても我々は是非ともエスペラントの採用から出發しなくてはならないことは明瞭である。前駐日シャム公使が東洋のエスペラントの必要を説いたと當時新聞紙に報ぜられたが我々もそれを痛感する。併し現在有用に使用さるべき青少年の精力の大部分が半可通の英語學習に浪費され動々もすればアングロサクソン崇拜熱を煽り立てるとゆう目下の切迫せる時期に於いて荏苒將來の福音の來る日まで手を拱いているべきではない。而も東洋中心の國際語の成立には是非共エスペラントと云う過程を通らねばならぬとする以上は積極的に此を採用し普及するのは目下の我等の急務である。言語の發展進歩には自ら法則がある。我々が眞に東洋文化の宣揚に志すならば西洋語とは言い條極めて合理的な組織を有するエスペラントを以て堂々對外の陣營を張り以て將來に備えなければならない。旣に理論上實驗上優秀なるものと認められているエスペラントの採用を拒み，却て區々の歐洲諸國語の學習を餘儀なくされているようであれば將來に東洋のザメンホフ，東洋のエスペラントを望むが如きは全く問題となり得ないと思う。筆者は如何なる點から見てもエスペラント卽時採用論を遠慮すべき理由を見出さない。善いことは直に實行すべきである。今日の非常時局に善いと知りながら實行しないのは國運を隆盛にする所以ではない。

今後の中等教育における外國語問題

石　黑　　修

前がき

わが國における外國語問題は，近頃においては，大正 13 年の米國の排日法案上程，昭和 2 年雜誌『現代』に藤村作博士の論說，昭和 10 年『朝日』に三上參次博士の論說が契機となつて盛に論議され，更に昭和 12 年以後，各方面においても，例えば『英語青年』昭和 13 年 1 月市河三喜博士，“Current of the World” 同じ年の 1 月，2 月に「將來の語學教育について」名士の回答，『教育』同じ年の 2 月に「教育審議會檢討と文化政策と外國語教育」の特輯，『文藝春秋』同じ年の 3 月に藤村作博士の「英語全廢論」，英語教育・支那語教育につき名士の回答，『英語青年』，『英語の研究と教育』同じ年 4 月，“Current of the Word” 昭和14年1月，2 月に「語學教育をいかにして時局に對應せしむべきか」の名士回答，『同』3 月，市河三喜，土居光知兩博士の「語學教育者の立場から」などが主なるもので，文字通り再檢討が行われ，支那事變を契機として國家意識の高まるにつれ，中等學校における英語科の廢止，教授時間の節減を實際に行うものもあつたが，その間逆に支那語を加えるもの，支那語にかえるものもあり，近くは教育審議會は女學校における外國語科の存置，實業學校におけるロシア語の追加を答申している。

以上の問題と動きに對しては，わたし自身も，『國民新聞』(大正 13 年)，『現代』(昭和 2 年) など引續き，新聞雜誌にわたしの考えを發表して來たし，世間でも一通り論じつくされているかの感もないではない。(例えば近頃出た『學生と語學』(矢の倉書店) の中野好夫氏の「語學——如是我觀」，『學生と學園』(日本評論社) の阿部次郎氏の「外國語の修得」など，わたしの最も共鳴して讀んだものである)。

しかし興亞政策の遂行とゆう新事態に處するため，外國語問題を過去現在の功罪よりも將來の對策を中心として少しばかり述べてみることにする。

1.　中等教育における外國語教授

必要の有無からいえば，過去において必要であつた樣に，今後も必要である。その目的は「教授要旨」に見えているが，その文化的意義とゆうか，教養は他の多くの教科と充分匹敵する價値を持つている。殊に最近の樣にともすれば文化的鎖國の傾向のある時は，——例えば文部省の留學生排止などその最も愚かな一つ——せめてもこの方面において次代の國民に充分世界を

見る眼，考える頭を養つてやる貴重な教科と思う。

2. 英語第一主義とその反省

從來英語第一主義は偶然かも知れないが正しかつた。それは英語とゆう言語が今日インド・ヨーロッパ語系の言語の中で外國語教育の目的に適う幾多の條件をもつているからである。政治的には今後英帝國の地位は多少變化があるかも知れないし，日本との關係においても修正さるべき（すべき？）ものがあるかも知れないが，上の點からいえば依然英語を第一としても誤りではないと思う。（たゞ氣になるのは教師の無反省と獨善である）。今日の反英，排英思想をもつて英語反對，排斥を叫ぶものがあるならば，それこそ嗤うべき考え方である。

たゞこゝで多少の考慮を要するのは，他の外國語との比率で，英語の 10 に對して，從來の獨，佛語の 1 といつた様なことは改める必要がある。（殊に實業學校において）。

ついでながら支那語科の問題であるが，實業學校を除いてわたしは殆どその必要を認めない。漢文教授において時文教授云々となつているが，今日の漢文の先生でその任にたえる人が殆どない。時文を解釋することはある期間これを學べば漢文の先生なら出來るが，それでは支那語教授の意義がない。實用教科として以外，今日支那語は無價値である。文化教材としては漢文でよい。

3. 外國語教授と國民的自尊心

外國語教授によつて拜外思想を養成し，國民的自尊心に影響するものがあるとすれば，それは罪は教師にある。事實過去においてはその傾向があつたが，それには理由もあつた。外國語をマスターするでなければならないのに，ミイラ取りのミイラで，マスターされるもののあつたことは，外國語教授の目的を正しく體得していないために起つた。今後はこれを修正して行かなければならない。

更に一つその影響の及びやすかつた理由をゆうならば，それは國民的自覺の缺乏と，國語教育の不振である。この方は幸にして今事變以來高まりつゝある。（否局部的には高まりすぎている）。

4 外國語教授の合理化，その他

外國語科を隨意科にすることにつきる。

現在について云えば，入學試驗における受驗英語の撤廢，教師の素質改善が最も急務である。教授法，教材の檢討も行う必要があるがそれは二次的のことである。

時間數は現在の中學校などでみると，入學試驗のため相當苦面して規定時間以上に教えられている様であるが，女學校などでは時間が不足である。わたしは現在の様な小學校の國語教育なら，（それは教師の罪もあるが國語そのものの混亂にもよる）1 年入學當初より課せず，五年制の中等學校なら 3 年位からもつと時間をさいて教える方がよいと思う。（日本語教育の不充分なまゝに外國語を教えられるため，外國語に對する理解も不充分なのが現狀である）。

外國語の種類は，英語の他に獨佛英，支那，ロシヤ語（これだけが現在の種類）の他，スペイン，ポルトガル，イタリヤ語を加えてもよい。更にそれらにもまして，蒙古，馬來，シャム（タイ），チベット，アラビヤ，イラン（ペルシャ）等東洋諸國の言語を實業學校（これはむしろ專門語學校において）では考慮に入れてよいと思う。こんなに並べたのでは一校ではそれは出來ないことは明かであるが，例えば東京，大阪，名古屋等の大都市では，學校により分業的にわけて，二部教授式にし，甲學校のものでも志望外國語により乙學校へ行ける様にしたい。又地方においてもこれを考慮に入れて，例えば 3 校ある都市なら，英語が各校，獨語 2 校，佛語 1 校

といつた樣なこともいゝし，必要がなければ1校にだけ獨語といつた樣にする。その外國語の種類などは土地の狀況によつてきめる。

外國語は隨意科とするが，最初の半年或は1年(第2學年ではない)だけ强制的にこれを敎える。そして，この半年，又は1年は理想をいえばエスペラントを敎える。每週6時，1日1時間としても勿論エスペラントがこれだけの期間で語學として敎え終るものではない。しかし外國語學習の基本練習として，音樂における do, re, mi, fa, so, la, si（この 國語音を日本語の發聲練習にやつている！）とか，譜讀練習としては充分である。

その後で希望による外國語選擇をさせる。そして希望のない場合は習わなくてもよいことにする。

（こゝで，外國語並にエスペラントの敎授細目をあげる必要があるが紙數の都合で省く）。

5. 外國語敎師の問題

英語科の廢止は考えないが，實質的に縮小されるため，多少の冗員が出來ることは確である。その淘汰は情實上困難があるが，理論上素質によつてきめるよりしかたがない。

逆に英語以外の敎師の不足，（特にエスペラントの敎師など）は，1 年乃至3年の敎員養成所をおいて再敎育(新敎育？)をする。

尙英語敎師の冗員(この方は反つて優秀な敎師を要求する位である)の一部は現代日本語敎員の養成に廻してもよいし，飜譯事業に轉職させてもよい。

結　び

以上わたしの考えるところの一般であるが，要は外國語敎授はもつとその使命を達成する樣な方策をたて，これを積極化することを提唱するものである。

英語敎育再檢討

——新秩序と言語問題——

敎育科學研究會員　**伊井　迂**

蛙を水に入れ火にかけておくと，水が湯になり煮え死ぬまで蛙は氣附かずに居る。馬鹿な話だが笑えない。敎育問題に關する限り我々の神經も餘り蛙と違わない。

北中支の小學校跡を視て「こんなに排日敎育が泌み込むまで知らずに居たとは」と歎息した人は少くない。新東亞建設の課題に當面して漢學者型か支那浪人型に過ぎぬ從來の支那知識の無力を齒痒がらない者があるか。天下の形勢は煮湯になろうとしている，敎育蛙は直に目覺めて飛躍しなければ煮え死ぬだろう。

我々日本人は敎育に熱心な筈だつた。日本兒童の就學率は 99.9% だ。上級學校への殺到率も世界一だ。どこの親も子供が學校に皆勤し全甲を取る樣血眼だ。それでいて我々が敎育に鈍感だとは。眞に奇異な現象だが，義務敎育8年制が提出されようと延期されようと，青訓と補習學校が靑年學校になろうと，義務制になろうと，敎科書が變ろうと國民學校案が出ようと，我々國民は一體手應ある反應を示したか，天氣か雷に對する樣に宿命的な受身ではなかつたか。色々な學制刷新案の矛盾や不徹底や混亂に見られる如く敎育に對する定見の窮乏は國民の下から上まで共通した惱みだ。「敎育の聖職」と崇め乍ら「先生と言われる樣な馬鹿」に委せ切り，

教育家は迂愚な村夫子の本性を脱せず，文教の首班は伴食大臣と呼ばれる。星や獸を研究する學者の學會はあるが，人の子を教える教育學の學會が無い（特殊な審議會や研究會はあるが）。

教育の樞軸たる學校機構は國民の生活の基礎たる家庭や產業機構と一體どれだけの關聯調和を持つているか。成る程學校と家庭や社會との關聯は絕えず論議され機械的に企圖されてはいるが，どうもちぐはぐな內面的な乖離は蔽うべくもない。こゝに根本的に反省すべき點がある。家庭も，農工商等夫々の仕事場も，村や町，講や組合等色々な社會生活場面もすべて現實的教育の道場である。何人もすべて教育者としての使命をもち，その能力を潜めている。この使命を覺醒しこの能力を振起發揚することが必要だ。惰眠すれば熱湯中に悶死すべき今，飛躍して自立獨往の教育機構の革新創建は，單にかれこれの教課の取捨ではなく，年限の伸縮でなく，行事の附課や緊張强化のみではない。國民各自教育家たる責務の自覺自負を必要とする。教員は村夫子の仙境から脫し，國民と現世の苦樂を共にしなければならぬ。かくて國民各分子の親和結合の下に眞に活きて働き且つ成長する新しい教育機構を生み出し得るのだ。それは社會の公民生活及び產業生活に卽し，それらの方面からの實際家の教育力を起用し導入し，少青年を生產的社會人に實踐的に鍛え上げる機關でなければならぬ。それは從來の中學校の如き身分的出世を目指しての上級學校への踏臺の樣なものであつてはならぬ。寧ろ其等旣に舊い物と化しつゝある教育機構を追い拔こうとしている新しく成長しつゝある教育施設に期待しなければならぬ。例えば，整備上にある青年學校や，各種養成所や，塾風教育機關や各種學校等の中に將來の國民教育機關の根幹にまで發達すべき素質を洞察すべきだ。無論現在それらの者は間に合せだつたり，ごまかしだつたり見るに堪えぬ場合も多い。しかし之等の中から經驗を集積し改善し磨きをかけ，實踐的勞作教育を基調とした新しい國民教育機關を立派に仕上げなければならぬ。

外國語教育の檢討も，以上の如き國民教育機構の全般的歸趨の洞察，それに對する國民としての我々自身の責務の自覺の上に立つてなされなければならぬ。

從來日本の高等普通教育（中等教育）の外國語特に英語の教科は，決して單に英米との交渉イギリス文化の攝取が目的だつたのではない。それは產業及び文化の當面の世界水準に急速に追い附き參與する爲の手段として課せられた。それは又國民に對しては高等專門教育及び最高學術研究に進む者と進まぬ者とを振り分ける爲の身分的教養の篩として課せられたものではなく，國民一般に對して知識を世界に求むる爲の出發點として與えられた。卽ち國民の世界的自覺の爲の手段としてゞあつた。しかしその當初と今とでは天下の形勢は變つた。後進國民の進出は先進者の壘を摩した。先進國民の世界文化に於ける比重は相對的に下つた。今英語を用いる事は世界的自覺の爲でなく，たゞアングロサクソン文化の研究乃至英米國民との特殊的折衝の便宜に限縮されて行く。英語國民との折衝さえも彼我均等の地位獲得の爲には彼の言語を無條件に使うことは反省を要するに至つた。我が國の外國語教育に於て當初意圖された精神を變化した現在世界の勢力均衡に照し國際正義に立脚して實現する爲には新たに出直さなければならない。其際，何を如何に採用すべきか。こゝに於いて旣にこの目標を自發的に追求努力している民間の教育事業たるエスペラント運動に注目する必要がある。旣述の如く我國の教育は根本的建直しの必要に迫られている。それについては民間の各種の個別的教育事業の從事者も國民全般のこの大きな問題——教育の根本的建直しの仕事——の全面を理解し，その中に於ける自己の責務を自覺して，全體の正しき解決に協力參與しなければならぬ。教育要路の側ではこれ等民間の自發的教育事業の力を認めてこれを起用し新しき教育制度創出の爲十二分に活用す

べき責務がある。

我國現在の新學制創出の努力は大陸に於ける新秩序の問題に聯關する。五族協和と言い，國際正義と言い，共同體と言い，エスペラント事業が理想として追及した所に暗合する。これは何も暗合ではない。歴史が現在に至つてやつと表面に押し出した必然の內的關聯だ。新秩序に照應する新學制では歐洲老國の言語を敎えることは適當ではない。こゝに協和と正義に立脚するエスペラントの本領は當然高く評價されるべきである。それは又新たに興隆する東亞諸民族の言語生活合理化及び理性と意志の陶冶に有意義なる基礎を供する。

現在，西洋では東洋語は專門の研究者の爲の特殊な講習所又は高級學校の特設科に於いてのみ敎えられる。正にその樣に東洋での西洋語（英獨佛語等）の敎授は特殊希望者の爲の研究會や高級學校に於いてのみ行われるべきである。現存の多數の中等英語敎員の大部分は，國民敎育機構の重點及び性格の轉換に從つて，若干の再敎育によつて，新しい國民敎育のエスペラント敎授者に轉化進出せしめらる可く，少數は特殊なる英語專門家として講習所乃至高級專門敎育に從事する道が殘されるだろう。

全面的敎育の刷新と外國語敎育轉換の上記の展望はその實現までには幾多の曲折もあろうが率直に大觀して結局必然である。

各種の敎育的使命を有する各產業團體や文化團體と共にエスペラントの團體もまた新しい敎育機構創出の重大なる國民的問題に於ける自己の責務を確認し，要路及び國民の間に立つて相覺醒し相携えて，互に勵まして，學制刷新の爲の諸機關に識見及び努力を供給しての大業の達成に努力しなければならぬ。

和文エス譯成績發表

a. 申し分のないもの。
b. a に近いが多少不充分なもの。
c. 大體よいが少し缺點のあるもの。
ĉ. 缺點の著しいもの。
d. 文章の構成に充分硏究を要す。

A. c. ミノル, Tonĉju, Seiiĉi, Ŝafokulo, Sen' Ok, Pino, Toa, Seiu Sogen, 井手尾元治, Vaporo, TIMUR, 只野人也, Nohara-Nobuko.

ĉ. OH-AK, ミミ, Konisi-Norio, 山石木三, Ueda-Masao, Sopiranto, 岩元正雄, Furbo, 河村義三, Nagoja T. S., M. Inaba.

B. b. Amikino, トト。

c. Barono Don, イマキヒデオ, 永江淸。

ĉ. 紗那子, マサハジメ, J.-Ŝ. プロシオン, Humi Sog n, 齋藤宗信。

d. G. H., Ĉelo, a (S+W+D), Marso, ORUGA, T. Kobajaŝi.

新課題　12 月號發表

A. 今週第一回の重慶爆撃は月曜の夜行われ，無數の爆彈が同市內外の軍事施設上に雨と降つて 可成の損害を與えた。

B. 今から考えれば不思議なくらいだが，當時の人は本氣でそう考えていた。

規定　制限：A, B いずれか一方を擇んで應募すること。（兩方へ應募したばあいはAの分を無効にする）。
氏名：誌上での匿名は自由であるが，原稿には，必ず住所氏名明記のこと。
用紙：ハガキまたはハガキと同じ型の紙。
締切：10 月 5 日着便。
宛名：學會內「和文エス譯」係。

KRESTOMATIO KRESKANTA (2)

LA PORDEGO DE L' INFERO

地獄の門

El INFERO

Tra mi vi venas urbon de turmento, 1
tra mi vi venas al dolor' ĉiama,
tra mi vi venas al damnita gento.
Aŭtoron mian gvidis justo flama, 4
la Dia Povo kreis min en kaŝo
kaj Ĉefa Saĝo kaj Praforto Ama.
Ne estis antaŭ mi kreita aĵo 7
krom la eternaj; mi eterne staras.
Ĉiun esperon lasu ĉe l' enpaŝo.
Mallumlitere nun ĉi vortoj baras 10
rigardon mian super volbo porda,
kaj mi: "Ho Duk', la senc' al mi malklaras."
Sed diris li, en pensdivenoj forta: 13
"Nun ĉesi devas en vi ĉiu timo,
nun ĉiu malkuraĝo estu morta.
De l' dolor-lok' dirita jen la limo, 16
trans kiu vidos vi la vean bandon,
kiu la bonon perdis de l' animo."
Kaj manpreninte min, li la komandon 19
prenis kaj, gaje, min per freŝ' influis,
kaj gvidis min en la sekretan landon.
Tie ĝemspiroj, plendoj, veoj bruis, 22
resonadante tra l' aer' senstela,
tiel ke miaj larmoj tuj ekfluis.
Cent lingvoj, vortoj de terur' kruela 25
doloraj veoj, kri' de furiozo,
voĉ' akra, raŭka, manoklak' ribela
sin tordis kaj tumultis sen ripozo 28
en la aer' sentempe noktkolora,
kiel la sablo dum turnventa krozo.
"Majstro — mi kriis kun harar' horora — 31

これは，カロチャイの訳したダンテ「神曲」の「地獄篇」から抜いた第3歌である。カロチャイは「神曲」を訳すにあたつて，原詩のもつ美しい形式 tercino (*terza rim*) をそのまま使つて訳した。

tercinoとは1行おきに3箇づつ韻を踏むもので，これを保つことは非常に困難であるが，カロチャイは，これをみごとになしとげ，しかもこのことによつて，内容を犠牲にした點はいささかもないといつてよいくらいである。有名なロングフェロー訳ですら韻をあきらめていることをおもえば，このカロチャイ訳は，エスペラントの勝利といつてよい。

このなかには言葉の特殊な使い方がたくさんあるがこれは韻文にのみ許されるものであるから，散文を書くとき取入れるようなことのないよう注意を要する。

1. 苛責。
2. =eterna
3. 地獄へ墮された。民族。
4. =kreinto。導いた。
5. =kaŝite.
6. 原力。
9. 歩み入り。
10. mal'lum'-liter'e.
11. 圓天井。

kion mi aŭdas? Diru, kia aro
vidiĝas do sub tia prem' dolora?"
Kaj li: "En ĉi mizero kaj amaro
tenatas tie ĉi animoj ĝemaj,
vivintaj kaj sen krim' kaj sen bonfaro.
Troviĝas inter ĉi malkuraĝemaj
l' anĝeloj, kiuj volis nek ribeli,
nek fideli, estante nur pormemaj.
Ekzilis la ĉiel' por ne malbeli,
rifuzis ilin ankaŭ la infero
por gloron de misuloj ne akceli."
"Ho Majstro, kia ŝiro de sufero
veigas ilin do kun tia forto?"
"Mallonge, jen pri ili la afero:
Al ili mankas eĉ esper' pri l' morto,
iliaj tagoj rampas tiel blinde,
ke ili envias ĉiun ajn pri l' sorto.
La mond' ignoras ilin, forgesinte,
kompat' kaj just' malŝatas, laŭmerite.
Rigardu, iru! Trakti plu ne inde."
Kaj nun, standardon vidis mi subite
girante flugi en senhalta paso,
por senripozo kvazaŭ kondamnite.
Post ĝi tumultis tia homamaso,
ke mi neniam ja eĉ konjektis,
ke l' mort' jam tiom sternis el homraso.
Kelkajn rekonis mi, kaj jen vegetis
ombro de tiu, kiu per abdiko
poltrona la Rezignon Grandan metis.
Jen estas — min sciigis ĉi indiko —
sekto poltrona, aĉa al okuloj
de Dio kaj de Lia malamiko.
Ĉi neniam vivintaj mizeruloj
estis nudkorpaj, ilin persekutis
venenaj vespoj, egaj muŝoj, kuloj,
Iliaj vangoj sangon ṣtrie gutis,
kun larm' la sango fluis sur la teron,

12. 公 (Virgilius 〔ヴァージル〕をさす, 以下 majstro とあるもおなじ)。 =estas malklara.
13. 判斷力。
15. 怯懦。
17. 嘆きの。隊伍。
18. 功德。
19. 把えて。命令權。
20. =refreŝigis 氣をひきたてた
22. 嘆息。訴え。
23. 反響して。 sen'stel'a
25. 恐怖。慘酷な。
26. 狂暴。
27. 嗄れた。拍手。反逆の。
28. 渦卷く。騒いだ。休息。
30. 旋風の。巡廻
31. =terureg-(it)a.
33. =subpremo
34. 悲慘。痛苦。
35. =estas tenata
36. 罪惡。善行。
37. =malkuraĝaj 怯懦な。
38. 天使。
39. 忠實である。 por'mem'a 自己本位の。
40. 追放する。=esti malbela=malbeliĝi.
42. 罪人。捉進する。
43. =korŝiro 痛苦。受難。
47. 逼う。
48. 美やむ。運命。
49. 無視する。
50. 慈悲。(彼等に) 相應して。
51. =Trakti ilin plu ne estas inde.
52. 旗。
53. =flirtante ひるがえつて。
54. 死刑を宣告されて。
55. 群衆。

k'e ĝin naŭzaj vermoj tuj englutis.
Kaj plurigarde, vidis mi riveron,
sur kies bordo homamaso ŝvelas.
"Majstro — mi petis — lasu ĉi misteron
ekscii, kiujn, kia leĝo pelas
tiel klopodi al transborda zono,
kiel ĉi surda lum' al mi rivelas?"
Kaj li: "Vi scios tion laŭ bezono,
kiam ĉi vojon finos ni, venonte
al la rivero trista, Aĥerono."
Nun la okulojn mi mallevis honte,
timante tedi lin, langon ligis
kaj mute iris je l' river' renkonte.
Kaj venis bark'; aĝul' en ĝi navigis,
blanka de oldaj haroj; kun kruelo:
"Ve, misanimoj — krie li timigis —
ne plu esperu vidon de l' ĉielo!
jen mi, kiu transborden vin ekspedas,
al la eterna fajro, frost', malhelo!
Sed jen, ĉu vivan korpon vi posedas?
For de ĉi tie! For de l' trup' de l' mort!"
Sed kiam vidis 'li, ke mi ne cedas,
li diris: "Tra aliaj voj' kaj bordo
eblas, ne tie ĉi, ke vi sukcesu.
Pli milda ligno taŭgas por transporto."
Sed nu la Majstro: "Ne kolerekscesu,
Ĥarono! Jen la volo tie, kie
la volo estas pov'! Demandoj ĉesu!"
La lanaj vangoj tuj mildiĝis plie
al la ŝipisto de la akvoj palaj,
nur ĉe l' okuloj cirklis flamoj strie.
Sed la animoj nudaj, lace falaj
perdis koloron, dentoklake tremis
dum aŭdo de la vortoj krudbatalaj.
Dion, gepatrojn ili ekblasfemis,
nasklokon, tempon, rason, familion,
nasksemon sian, kaj kiu ĝin semis.

56. 推測する。
57. =faligis = pereigis. 人類。
58. 見覺えがあつた。嘆息した、
59. =spirito 靈魂。讓位。
60. =malkuraĝa. 退位。
61. 指示。
62. =grupo. = abomena.
64. =tiu ĉi.
65. 裸かの。迫害する。
66. 毒ある。熊蜂。ぶよ。
67. 頰。條をひいて。滴らす。
69. 嘔氣を催すような。虫、飯みこむ。
70. =rigardante pluen
71. ふくらむ。
72. 先生。=igu (min). 神[illegible]。
74. 對岸の。地帶。
75 =malklara. =aperigas.
78. 悲しみの。アケロンテ（ローマ神話の三途の川）。
79. 恥じて。
80. うるさがらず =silentis.
81. むかつて。
82. 小帆艇。=grandaĝulo =maljunulo. =veturigis.
83. =maljuna. 殘忍。
84. =malbonaj animoj
86. =sendas.
87. 酷寒。闇黑。
90. 讓る。
91. (「煉獄」への道を暗示する)
92. =estas ebla.
93. 溫和な。木材（で作つた「船」をさす）。
94. =tro koleru
95. カロンテ（アケロンテの渡守
97. 毛深い。
99. 循環する。
101. 歯をがたがたさせて。震うた。

Poste de l' barko ili fuĝis ĉiom
kaj vee kuris al la bordo nigra,
atenda ĉiun, kiu spitas Dion.
Demon' Ĥarono, kun okulo tigra,
la vojon baras, repelante puŝas
remile tiun, kiu estas pigra.
Kiel folio, se l' aŭtun' ĝin tuŝas,
unu post unu falas, ĝis ornamo
de l' tuta branĉo sur la tero kuŝas.
tiel la sem' malbona de Adamo
de l' bord' po unu sin malsuprenlasas,
kiel la birdo laŭ logfajfa gamo.
Kaj tra l' mallumaj ondoj ili pasas,
kaj antaŭ ol la bark' al bord' alia
alvenis, cise novaj jam amasas.
Nun la ĝentila Majstro: "Filo mia,
el ĉiu land' alvenas post elspiro
ĉiu, mortinte en kolero Dia.
Ĉi tie ili pretas je l' transiro,
ĉar dia justo tiel ilin spronas
ke ŝanĝas sin la timo je deziro.
Animo ne transvenas, se ĝi bonas,
do, se Ĥaron' vin traktis iritite,
ties signifon nun vi jam rekonas."
Li finis, kaj la morna kamp' subite,
ektremis tiel, ke eĉ nun, la pensa
imag' teruras min, banante ŝvite.
De l' larma ter' naskiĝis vent' intensa,
kaj el ĉi vento ruĝa fulmo flugis,
prirabis min de ĉiu povo sensa.
M falis, kiel kiun sveno jugis.

Trad. de K. Kalocsay

102. =sovaĝaj
103. 罵つた。
104. 生地。=nasktempo〔生れ日〕=naskraso〔生みの種族〕=naskfamilio〔生家〕
105. 亂。kaj (ĉiun) kiu. まいた。
106. 避難した。
108 =atend nta. そむく。
110. 追返して。
111. =per rem'il'o 櫂で。=malagema.
112. =kvazaŭ.
113. 飾り=foliaro
115. =ido 子孫。
116. 下りて行く。
117. 誘ひ笛の。音階。
120 =maltranse こちら側に。
122. =spire'ĉerpiĝo=la lasta spiro
125. 拍車をあてる
128. =kial. =incitite.
129. =komprenas.
130. 陰鬱な。
132. 汗。
133. 激しい。
134. いなずま。
135. 掠奪する。五感の。
136. 氣絶。枷にかける。

Kolomano Kaloscay (kaloĉai: 1891–) Hungara doktoro medicina. Ĉefredaktoro de Literatura Mondo. Originalaj poemaroj: Mondo kaj Koro (1921), Streĉita Kordo (1931), Rimportretoj (1931). Tradukitaj poemoj: Johano la Brava, de Petöfi (1923), Tragedio de l' Homo, de Madách (1924), Eterna Bukedo, internacia antologio (1931), Romaj Elegioj, de Goethe (1932), poezia parto de Hungara Antologio (1933), La Infero, de Dante (1934), Lingvaj verkoj: Lingvo Stilo Formo (1931), Parnasa Gvidlibro (kun G. Waringhien, 1932), Plena Gramatiko (kun G. Waringhien, 1935). Aliaj tradukaĵoj: Arthistorio, de Hekler (1934), Vivo de Arnaldo, de B. Mussolini (1934).

伊藤己酉三

和文エス譯研究會

10

指導者　A 氏
會　員　B, C, D, E, F 氏

A: これから早速始めましよう。最初の問題は

3月31日を以て終る昨年度の國民總貯蓄は七十三億八千萬圓の額に達し，政府の目標とする八十億圓に極めて近い好成績を納めた。

で難しい點はないようです。先づ「**昨年度**」ですが。

C: la lasta jaro は la pasinta jaro ではいけませんか。

F: 何だか物足りないような氣はしますが他に適當な譯が見當りません。

E: la budĝeta jaro は如何でしよう。

A: 普通 jaro は1月1日に始まり12月31日で終るものですから la lasta jaro だけでは不充分です。budĝeta jaro は豫算上の年度です。但し Plena Vortaro によれば budĝeto は「一年の收入支出合計」をも意味することになつていますが，新撰和エスでは會計年度に budĝeta jaro を當てています。しかし私は financa jaro 或は fiska jaro が適當と思います。fisko は國庫で，あまり用いられない言葉ですから之を避けるならば financa の方がよいでしよう。「**國民總貯蓄**」の貯蓄はどうです。

B: ŝparmono では。

E: ŝparaĵo の方がよいように思います。

C: ŝparado でも同じ結果になるんではありませんか。

A: ŝparmono では少し狹い感があります。ŝparado は貯蓄することです。この場合は貯蓄したものですから ŝparaĵo がよろしい。これに總をつけると tuta ŝparaĵo となります。「國民」は此處にも出ましたが，どうも之を nacia とするか de nacio とするか或は popolaか de popolo かはつきり判斷のつく方が少いように見えます。勿論場合によつてどちらでも通じる場合もありますがこの場合はどうお考えですか。

F: 國民全體としての貯蓄ですから nacia でよいと考えます。

D: 私は國民全體が作り上げた ŝparaĵo ですから de la nacio とすべきものと思います。

B: この國民は政府に對する國民で de la popolo ではないでしようか。

A: 別に政府に對する國民ではないでしよう。政府とは關係なく兎に角國民全體によつてなされた貯蓄だと思います。nacia は例えば nacia karaktero, nacia kostumo, nacia lingvo 等のように「或國民に獨特の」の意味で internacia と相對しているので此處では不適です。それで國民總貯蓄は la tuta ŝparaĵo de la nacio となるわけです。その後はあまり問題になるような語句はありませんね。作文を願います。

La tuta ŝparaĵo de la nacio en la lasta financa jaro finiĝos je la 31-a de marto, kiu atingas al la sumo de 7,380,000 jenoj, kaj ĝi gajnas la bonrezulton tre proksiman por 8,000,000,000 jenoj, kiuj la registaro antaŭkalkuliĝis.

この文は所々訂正を要するようです。

B: kiu atingas の kiu は場所が違うように見えますが，kiu finiĝos となるべきでありませんか。

A: そうですね。この文から見ると kiu は 31-a を受けるものと見なければなりませんが，意味の上からは ŝparaĵo を受ける積りで書かれたものかと思われます。しかし finiĝos の主語は jaro ですからどうしても jaro, kiu finiĝos... となるべきです。尙3月

31日に終るのは毎年きまつているので未來にせず finiĝas と現在形にすべきです。それから atingas は atingis とすべきですね。他には。

D: ĝi は何でしようか。ŝparaĵo にしても sumo にしても不合理に思われます。

A: つまり七十三億八千萬圓に達したことが好成績なんです。又七十三億八千萬圓が卽ち好成績であると見てもよろしい。それで atingis bonan rezulton de la sumo de 7,380,000,000 jenoj 或は atingis la sumon de 7,380,000,000 jenoj, tre bonan rezulton としてもよいでしよう。por は al とすべきです。antaŭkalkuliĝi は目標を意譯したものでしようが, registaro が主語なら -iĝ- は不要で kiujn とする, kiuj が主語なら laŭ la registaro としたらよいでしよう。次は

Por la lasta financa jaro, kiu finas la 31-an de marto, la tuta sumo de l' ŝparaĵo de la nacio atingis sumon de ¥7,380,000,000. Tio estis bona rezultato tre proksima al la registara celo ¥8,000,000,000.

で大分よくなりました。

E: Por は en の誤りですね。それから finas は finiĝas でしよう。

A: Por は期間を示すのでその積りで por を使われたのでしようが, Mi vojaĝos por tri semajnoj. Mi laborados tie por tri jaroj. の例のように或期間を限るのです。此處では en がよろしい。その外は la sumo とし, registara を de la registaro とすることです。

次は

La tuta ŝparaĵo de la nacio de la lasta financa jaro, kiu finiĝis ĉe la 31-a de marto, atingis al 7,380,000,000 jenoj da sumo, kaj ĝi montris bonan re ulton tre proksiman al 800,000,000 jenoj, kiu estas celita de la registaro.

です。da sumo は sumo de がやはり本當です。金額の高が七十三億八千萬圓だからと考えられたのでしようが, 七十三億八千萬圓とゆう金額なのです。kiu estas celita は kiuj estas celitaj とすべきです。

では次に譯例をお目にかけてこの問題は終りにしましよう。

La tuta ŝparaĵo de la nacio en la lasta financa jaro finiĝanta la 31-an de marto atingis ¥7,380,000,000, bonegan rezultaton tre proksima al la sumo de ¥8,000,000 celitan de la registaro.

La tuta ŝparaĵo de la nacio en la lasta fiska jaro, kiu finiĝas la 31-an de marto, sumiĝis je 7,380,000,000 jenoj, kio estas bona rezultato tre proksima al la celo de la registaro 8,000,000,000 jenoj.

問題 B は

滿更知らぬ仲でもないのに, 殊更そんな意地惡をしなくても よさそうなもんだ。

です。こんな日常の話は難しい單語がない代りに原文の感じを出すのが難しいものです。或は今迄の B 題の中で一番難しいかも知れません。今度は最初から皆さんに思い々々に譯してみて頂きましよう。原文では誰が誰に意地惡をしたのかわかりませんが, その點は適當にして下さい。この原文はあまり直譯したのでは砂を嚙むような味のないものになりますから或程度意譯も必要です。……

先ず

Ĉar ni ne estas tute nekonata interrilato, mi volas ke vi ne agas tiel malagrable al mi precipe.

です。

E: interrilato は仲でしようが此處ではおかしいですね。

A: ni estas en interrilato ……ならよいのです。それと nekonata interrilato ではなくて interrilato de nekonato となるべきです。しかし nekonato なら interrilato の

ないことは當然なのですから，interrilato を使うことが不適當だと言えます。ne...tute ne とされたのは「滿更……でない」の譯としては結構ですが。

D: precipe は「殊更」の譯としては不適當だと思います。intence の方がよいのではありませんか。

A: そうです。agas は agu と命令法にした方がよろしい。しかし mi volas, ke... は大して憤慨している感じが出ません。

次は

Ni ne estas tute koraj amikoj, sed almenaŭ mi volas, ke li speciale ne faru tian malicon por mi.

です。

B: これも前と同じようですね。前半は tute koraj amikoj ではないとゆうのですが通一遍の友達だとゆうことかも知れません。

D: この speciale もよくないと思います。

A: 御說の通りです。それから por mi とありますが，kontraŭ mi とすべきです。この文は「我々はあまり仲の好い友達ではないが，僕に意地悪することだけは止めてくれ」とゆう感じです。

次は

Estas pli bone ne konduti intence tiel malice al li, ĉar vi kaj li ne tute konas sin reciproke.

です。原文を離れてみれば可成達者な譯ですが，單に相手に忠告する言葉としか感じられません。tute koni, ne tute koni はよくありません。tre bone koni とか ne tre bone koni とすべきです。

次は

Ni estas ne tute nekonataj unu al la alia, do li ne bezonus intence tiel malice agi kontraŭ mi.

で，之も可成しつかりした文ですが，「しなくてもよさそうだ」をそのまゝ普通に譯しただけで，どうも弱いようです。その人になつた積りで言つてごらんなさい。間が抜けた感じがするでしよう。

最初に申上げた通り，原文の通りに單語をあてはめたのでは，こんな氣持を表す場合には巧くいきません。私にも果してうまく譯せるか疑問なんです。まあこんなことにでもしたらどうかと思います。

Kia senskrupululo (li estas), ke li faras intence tian malicaĵon, malgraŭ ke li ne estas tute nekonata!

Ĉu ne estas arogantaĵo, ke li faras intence tian malicaĵon, estante almenaŭ iom konata de mi!

Tia arogantulo li estas, ke li faras tian malicaĵon kontraŭ mi, kiu ja ne estas tute nekonata de li.

Ĉu mi meritas, ke li agu tiel malice kontraŭ mi, kiu ja ne estas tute nekonata de li!

？と！が重なる時は？を省略することは御存知と思います。これは難し過ぎたようですが，こんな例もあるとゆうことを御承知になればよいと思います。では今日は之で終りとします。

概評

今回は應募が少く，殊に常連の出來る方の中で應募されない方があつたので一般に成績はよくなかつた。殊にAは難しくないと思つたが案外であつた。

A. 貯蓄は mondepono があつたが，これは預金である。又總貯蓄を ĝenerala ŝparamono とした方があつたが，これは總＝ĝenerala と考えた誤りである。ĝenerala ŝparado とゆうのもあつたが，この場合の ĝenerala の用法はよい。しかし之は國民全部が貯蓄することで意味が違う。

B. malgraŭ を用いた方は多いが malgraŭ が前置詞であることに氣が付かないように見られた。本題では和エス辭書は殆んど役に立たないことに氣が付かれたであろう。しかし殊更には speciale, precipe の外に〔故意〕と斷つて intence とあるが，割合に少いことは不注意或は原文の解釋不充分と見られる。

（**「成績發表」**と**「新課題」**は p. 35 に）

LA REVUO ORIENTA

Oktobro 1939 Jaro XX N-ro 10

ハリウッドは エスペラント映畫大流行

こんどは RKO が

さきに報道した MGM の大作「痴人の悦び」の臺詞の一部分にエスペラントを入れたことは，全世界に大きな反響をよびおこしたが，こんどは，ハリウッドにあつて MGM と覇を爭う RKO も，近く製作に着手する映畫「陰謀」の臺詞の一部と，映畫に出て來るポスター全部とにエスペラントを入れることに決定した。

ザメンホフの家 取除かる

ヘロルド第 26 號（6 月 16 日）へ寄せたヴィセンフェルト氏の通信によれば，ワルシヤワ發行の一小ユダヤ新聞は，「ビアウストクのザメンホフの家取除かる」と報道したとのことである。これによると，ザメンホフの生家はその周圍の土地が大企業によつて買とられ，すでに取除かれたとゆうのである。事實とすれば，まことに殘念なことである。

來年度萬國大會は マルセーユに決定

來年度開かれる第 32 回萬國エスペラント大會は，皇紀 2600 年を祝う日本で開かれることが世界各國のエスペランティストによつて望まれていたが，時局のにめ不可能とおもわれるにいたつたので，その行衞は，味をもつて眺められていたが，ベルンの大會において，フランスのマルセーユで開かれることに決定し，日程（8 月 3 日—14 日），組織委員會の構成も發表された。ヨーロッパに大戰がおこつた今日，はたして來年，この大會が持たれるかどうかは疑問である。マルセーユで萬國大會の開かれるのは，はじめてであるが，この港市の國際定期市は，毎年エスペラント版のポスターや封緘紙で宣傳していて，エスペラィンテストにも親しみぶかい。

學藝新聞エスペラント欄設置

「日本學藝新聞」（欄外にエスペラントで “La Japana Kultura Gazeto” と書いてある）では，エスペラントの欄を設けることにし，9 月 5 日號から掲載することになつた。この欄は毎月 5 日號に掲げられ，エスペラント界の消息とエスペラントによつて得た海外文化消息とを內容とするものである。（發行所 東京市 麹町區 內幸町 二ノ二二 日本學藝新聞社，一部10 錢）

〔公 告〕

普通試驗施行

10月 福岡で

下記のとうり普通試驗を行います。

昭和 14 年 9 月 12 日 試驗委員會

期 日 昭和 14 年 10 月 22 日（日曜日）
場 所 福岡市（試驗場未定）
申 込 10 月 10 日までに，學會あてに，住所氏名（ローマ字綴つき）明記，受驗料をそえて，お申込みください。
發 表 合格，不合格は受驗者へ通知し，合格者氏名は學會機關誌で發表します

昭和14年全滿エスペラント懇談會

(8月6日於新京日滿軍人會館)

I **集合** 早朝より當地在住者及び南北滿洲各地より遠來の「サミデアーノ」新京驛前觀光協會樓上に參合。

II **巡覽** 九時發觀光バスにて國都首要地點を巡覽，正午，會場たる日滿軍人會館に至る。

晝餐會

III **懇談會** 13時30分開會

A **開會ノ辭** 中村喜久夫氏

B **座長，副座長選擧** 由比氏時間節約の爲選擧を廢し座長に荒川氏，副座長に安部氏を推選することを發議し滿場一致可決す。

祝電朗讀(松本氏)

C **議 事**

い 宮崎大會援助方法の件(新京提案)

松本氏より提案の趣旨に就き詳細說明する所あり，更に由比氏，安部，高木氏等より種々意見出で結局左の如く決議す。

1 援助方法としては缺席參加者を成るべく多く募ること。

2 出席(實際參加)者あらばその中より代

第28回 日本エスペラント 大會日程

昭和15年4月28日(日曜) 午後6時-9時

前夜懇談會 (Komuna Vespermanĝo)

會場：宮崎市宮崎縣公會堂食堂

＊便宜上此の時より大會受付開始

4月29日(月曜，天長節)

大會第I日

會場：宮崎市本町宮崎縣教育會館

午前8時 開場，受付開始

午前9時 天長節奉祝

午前9時30分 大會開會式，小坂賞授與式

午前10時30分 大會協議會

午後0時半 記念寫眞撮影，午餐會，各地代表挨拶

午後2時 日本エスペラント學會維持員會總會

午後3時-5時 分科會，九州大會，高等試驗

午後6時-9時 大會の夕，懇親晩餐會，分科會報告

午後9時-10時 餘興

(縣，市斡旋の鄉土舞踊其他)

午後10時 閉會式

4月30日(火曜)

大會第II日

聖蹟參拜(觀光)

第I班

官幣大社宮崎神宮――八紘之基柱――青島――鵜戶神宮(遊覽バス乘車)

第II班

西都ケ原，美々津(遊覽バス)

第III班

延岡市――高千穗峽――天之岩戶〔宮崎――延岡(汽車)延岡――高千穗(バス)〕

參加費用の概算

參加費	1.00	
記念寫眞代	.50	
前夜晩餐會費	.80	
晝食費	.50	
懇親晩餐會費	1.50	*
觀光費(晝食費共)	3.00	*
宿泊料 (1泊)	2.00	

但し＊印に對しては縣，市當局より大部分の補助ある見込

注意 大會協議會に對する提案及び分科會開催希望者は10名以上の贊成署名の上可成本年中に準備委員會宛提出のこと

不在參加歡迎

其旨を記し參加費を拂込まるれば參加章プロトコーロ其他大會記念品呈上，尙早期申込大會出席者20名に對し premio 贈呈

寄附受付開始

本大會に對する同志諸氏の御寄附を喜んで戴きます。

送金は凡て振替(鹿兒島8802番)利用のこと

第28回日本エスペラント大會準備委員會
宮崎市南廣島通りIII 杉田醫院內
振替鹿兒島8802番



向つて左から〔前列〕金, S-ino k S-ro Kio, 平田最高檢察廳次長, 安部敎授, 饒村博士, 駒見,〔中列〕大木, 石川, 吉岡師, 余川, 由比,〔後列〕今里, 中村, 住吉夫人, 住吉博士, 田中, 藤澤, 松本, 小池諸氏。〔嵌込〕荒川氏。

表者を定ること。

3 前項出席者の旅費は無論自辨なるも在滿同志の援助は之を妨げざること。

右に關する取扱は MES 本部にて取扱い聯絡に任ずるものとす。

ろ 滿洲グラフ, 弘報處關係出版物にエス語採用を要望する件(新京提案)

右提案に關し中村, 田中兩氏交々說明する所あり, 左の如く決議す。

1 提案通りエス語採用の要望運動を爲すこと。

2 此方法は新京エス會に一任すること。

は レヴオ・オリエンタ誌上に滿洲ページ或は滿洲特輯號特設の件(新京提案)

松本氏說明下の如く決す。

滿洲ページよりは實現し易き特輯號の特設を要望することとし, 之に關する學會との連絡及び編輯等實行方法は新京エス會に一任すること。

に 滿洲エスペラント聯盟 (MES) 本部を爾今新京エス會に科す件(奉天提案)

安部氏より, 現在の情況にては奉天よりも新京に置くを適當とする所以を詳述す諸氏より質問及び諸說出て下の如く決議

1 提案通り新京に移すこと。

但し新京にては各地同志の協力を條件として引受ることを保留す。

2 右に付き新代表者を荒川氏と定む。

3 在各地の連絡者

奉天	田中覺太郞
ハルビン(北滿一帶を含む)	S-ro Kio
瓦房店	由比忠之進
大連	(由比氏より交涉の上決定する筈)

ほ 滿洲 LANDA ASOCIO 結成の件(瓦房店提案)

由比氏より國際的見地より, IEL に對する發言權確保の爲 Landa Asocio 結成の必要を痛說。Kio 氏ハルビン等の地にては統一困難なる事情を述ぶ。依て本案は保留とし, 決定は他日に讓ることに決定

へ 次回總會開催地の件(新京提案)

滿場一致奉天に決す。

これより下の諸件に就き懇談的に意見を交換す。

1 植樹運動に參加の件。

2 滿洲案內エス語版發行の件。

3 滿洲建國運動史及それに類するもののエス文發行の件。

4 圖書館にエスペラント書籍を備え付けしむる件。

5 協和會運動との協力の件。

6 滿洲で日本エス大會(又は東洋エス大會とゆうべきか)を開かしむる件。

7 吉岡行辨氏の平和之鐘樓建設に協力する件。

D **講話** 滿洲國最高檢察廳次長平田勳氏は特に本會に臨席し, 一場の講話「時局とエスペラント必修」を與えらる。蓋し本會に一段の光彩を添えたるのみならず, 列席者を感動せしめたること深大なり。

E 日滿軍人會館の行事を終り, 車を列ねて中央飯店の晚餐會場に赴き, 18 時 30 分卓に就き談笑の間歡を盡し 21 時 30 分散會。

SUR LA ĴURNALISMO

新聞雜誌とエスペラント

各地報道

記事輻輳につき來月號にまわします。

本號だより

「中等教育における外國語の問題」の特輯を贈ります

いままでにも，この問題はたびたびとりあげましたが，今度は，國家百年のはかりごとに對する，われわれの協力とゆう立場から，とりあげることにいたしました。

そのため，せまい意味での宣傳の立場からは，うなづきかねるふしも見えるかとおもいますが，エスペラントの普及が，日本民族の文化的發展に，大きな貢献をなすものであることを確信するならば，宣傳第一で行つても，國民的協力の立場から行つても，たどりつく結果は，同時に，日本文化の前進への貢献であり，エスペラントの普及であることがわかるはずであります。

外部からいただきました回答も，それの 99% までは，結論として，執筆者の意志にかかわりなく，エスペラントを自動的に要求しております

外部に對する enketo は，政治，教育，國際文化，産業，文藝，新聞雜誌，そのほか，いろいろの部門にあつて，教育問題と言語問題とに御理解のふかいかたがた，およそ 150 氏にあてていたしました。お答えいただいたのは 47 氏。いずれも，一般の「名士回答」に見られぬ熱心さをもつて御回答をおよせくださいましたことは，感謝にたえません。この問題が，いま，いかに重く見られているかを一層ふかく感じました。

われわれは，いたずらに，イギリス語を排撃するとゆう排他的な態度をとるべきでなく，イギリス語をして，そのあるべき場所にあつて，もつとも有効に，もつとも健全に，日本文化に役立つための手段であらせるとゆう立前で行くべきであります。

そのためには，イギリス語關係のひとびととの，へだたりない協力が必要であります

教育關係の方面にお知りあいのあるかたは今月號をひろくおくばりください。

○

6 月號の卷頭で「會費について」お願いしましたところつぎのような結果を得て，感激しております。

〔新賛助會員〕（5 月 15 日 ——8 月 31 日）〔普通會員から〕野知里慶助氏（三重），西澤靜子氏（高雄），〔正會員から〕松原ゆきゑ氏（大阪），鈴木秀雄氏（東京），阿部年雄氏（大阪），前田勤氏（東京），丸山丈作氏（東京），後藤靜香氏（東京），寺尾三千春氏（フィリピン），狩俣寛業氏（出征中），新田爲雄氏（北海道），上田正雄氏（前橋），伊藤己酉三氏（東京），淺田一氏（東京）

下に最近 3 年間の會員種別會費拂込比較表を掲げます。正會員數のうち太字は，その月の普通會員數より多いことを示しております。これによつて見ると，4 月と 5 月（6 月號は 5 月 12 日發送）のあいだに，明瞭な不連續線のあることにお氣づきでしょう。

なお，新しい會員の獲得についても，一層の御協力をお願いいたします。 (M-Ŝ)

	昭和年	普	正	賛	特
1月	12	64	72	3	0
	13	88	95	8	0
	14	38	53	5	0
2月	12	42	35	2	0
	13	44	40	0	0
	14	46	33	1	0
3月	12	61	42	2	0
	13	61	33	1	2
	14	64	40	0	1
4月	12	39	40	2	1
	13	26	34	0	0
	14	29	29	0	1
5月	12	58	36	0	0
	13	47	31	2	1
	14	30	53	7	1
6月	12	60	58	0	0
	13	49	42	0	1
	14	37	61	7	1
7月	12	30	44	0	0
	13	60	51	1	2
	14	30	44	2	0
8月	12	20	22	0	0
	13	30	26	0	0
	14	19	33	6	0

毎月一回 一日發行　エスペラント　第七年 第十號
昭和十四年九月十日 印刷納本
昭和十四年十月一日 發行
編輯兼發行人　大井學
印刷人　竹田佐藏　東京市神田區三崎町二ノ四
印刷所　一匡印刷所　東京市神田區三崎町二ノ四
定價一部20錢・送料5厘
6 月分 1 圓 20 錢・送料共
1 年分 2 圓 40 錢・送料共
發行所　財團法人 日本エスペラント學會　振替東京 11325
東京市本郷區元町 1 丁目 13 番地 4　電話小石川 5415

LA REVUO ORIENTA
Monate eldonata de
Japana Esperanto-Instituto
Japanujo, TOKIO, Hongo-Motomati
Abonkotizo: 4 jen.

明治七年一月十二日第三種郵便物認可
昭和十四年九月十日印刷納本
昭和十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）
「エスペラント」第七年第十號
定價二十錢（送料五厘）